

龍温語録目次

一	我が心	七
二	お直しに預るといふ事	三
三	方向轉換	三
四	攝取の力	三
五	一ツことを、能く、聴くべし	三
六	往く心になれば往き易し	四
七	何もかも忘れて嬉しうなる也	五
八	聞法飽くなし	五
九	寸長く、尺短し	六
一〇	聞	七
一一	信心正因	七

明治
43.12.24
二 肉交

龍温語録目次

一三	聞きやうに狂ひあり……………	八
一三	よくく生起本末を聞くべし……………	八
一四	大悲の回向……………	九
一五	命は法の寶……………	一〇
一六	隣の寶……………	一〇
一七	味を知れる鮮し……………	一一
一八	歡喜の源泉……………	一二
一九	珠玉を吐くが如し……………	一三
二〇	心和らぐべき也……………	一三
二一	求道心……………	一四
二三	六字に懺悔の徳あり……………	一四
二三	念佛の大益……………	一五
二四	迷へば東西俱に失ふ……………	一六

二五	蟹の手を蕩されたるが如し……………	一七
二六	恩にも受けると也……………	一八
二七	口と心、耳と心……………	一九
二八	疑ひと愚癡……………	一九
二九	お興への信心……………	二〇
三〇	一稱一念知られざるはなし……………	二二
三一	眞實が届けば疑晴れる……………	二二
三二	一念にたのめの事……………	二三
三三	希望……………	二三
三四	轉倒の凡夫……………	二三
三五	我が身を呵す……………	二四
三六	一人くの凌ぎ……………	二四
三七	赤尾の入道、我心に頼む……………	二五

三八	因縁……………	三六
三九	宿善を案じるな、御縁を喜べ……………	三七
四〇	起るは宿善也……………	三六
四一	法水入らざれば疑垢脱ちず……………	三六
四二	多ければ價安し……………	三六
四三	佛法の大意……………	三六
四四	信は得ずとも先づ喜ぶべし……………	三六
四五	法爾の道理……………	三六
四六	御慈悲の我物になる事……………	三六
四七	さしうる事……………	三六
四八	あやまちの事……………	三七
四九	疑起す人少し……………	三六
五〇	疑のはらしやうの事……………	三六

五一	疑晴れる遅速の事……………	三六
五二	疑を御化導の杖で打出して貰ふ事……………	三六
五三	疑は信のウラハラの事……………	三六
五四	疑ふものがらの事……………	三六
五五	自力の離れぬ間は疑晴れぬ事……………	三六
五六	疑は無明が根となる事……………	三六
五七	臨終の取詰らぬ心なる事……………	三六
五八	我心で願力のたのまれぬ事……………	三六
五九	タノム信する事……………	三六
六〇	我機を歎くも僞慢也……………	三六
六一	よりかゝる事……………	三六
六二	二ツ一ツの思ひ……………	三六
六三	聊縁同時……………	三六

六四	報恩……………	四
六五	慕る者、歎く者、口説く者……………	五〇
六六	改めるより信心の手は上る也……………	五一
六七	法を得手に引く……………	五二
六八	樂屋と舞臺との取違へ……………	五三
六九	聞き心、向ひやう、得る相……………	五四
七〇	聞き心に種々の誤りあり……………	五五
七一	誤りとは不急を急ぐ也……………	五六
七二	名號を御回向の事……………	五七
七三	爲の一字須彌山より重し……………	五八
七四	一人たりともといふ本據……………	五九
七五	我身一人のためと引受けらるゝ所以……………	六〇
七六	親一人とは思へても、子一人がおもはれぬ……………	六一

七七	實の山に手を空しくして歸る……………	六二
七八	螟蛉の子……………	六三
七九	願心終不退……………	六四
八〇	フカクタノム……………	六五
八一	二種深信……………	六六
八二	極難信……………	六七
八三	冥加之事……………	六八
八四	後生助け給への事……………	六九
八五	目標とすべきもの……………	七〇
八六	言に失なく、心に失あり……………	七一
八七	たのみ心の教へやう……………	七二
八八	願行具足と機法一體……………	七三
八九	たのむ一念に願行具足……………	七四

九〇 稱名信心歸命是一也……………五

九一 惡人になつて助けて貰ふ也……………七

九二 念持の義……………六

九三 回向の信心とは、六字によりて、我心に御慈悲を受け持つ也……………八〇

九四 タノメの御言の事……………八一

九五 佛心凡心一體……………八二

九六 三信の味ひ……………八三

九七 まこと……………八四

九八 至り届いた心……………八四

九九 一ツ心也……………八五

一〇〇 後生助け給への御言……………八五

一〇一 たのむ一念に覺わなき味ひ……………九〇

一〇二 他力の發起……………九一

一〇三 雜行は自ら捨たる也……………九二

一〇四 後生に實意のなき事……………九三

一〇五 大事に思ふたと、なりたとは異ふ……………九四

一〇六 人並と思ふべからず……………九五

一〇七 親が子に禮言ひて手習ひさす如し……………九七

一〇八 後生助け給へとたのめとは、外の心は起らぬ程に心配するなよとの仰せ也……………九八

一〇九 押付氣味……………九八

一一〇 凡夫で定められぬ一念……………一〇一

一一一 善知識のことばの下の事……………一〇三

一一二 一念と後念……………一〇三

一一三 甘露の念佛……………一〇四

一四 病める青年に遣せる法話……………104

一五 妙薬の力……………104

一六 急がば廻れ……………106

一七 三信即大悲心……………107

一八 自力のかなはざること……………107

一九 只今とおもはれぬ事……………107

二〇 臨終の一念……………107

二一 臨終悔るべからず……………111

二二 平生業成……………113

二三 自の宿業の有無を疑ふ可からず……………114

二四 疑ふは己が罪也……………115

二五 雲と月……………116

二六 我心を先きに立てる……………117

二七 心の底の味ひが最微細也……………118

二八 盲人の杖を失ふ如し……………119

二九 危垢先除くが如し……………120

三〇 歸する心の疑なきを信心といふ……………121

三一 他方でなければ晴れぬ疑あり……………121

三二 無疑の一心……………122

三三 疑のなくなりた心ばね……………123

三四 衆生が佛を捨てる也……………124

三五 大悲が届いて疑晴れる也……………127

三六 疑は如何にして晴るか……………128

三七 疑に種々あること……………129

三八 後生大事と思はれぬ疑に就いて……………130

三九 後生一大事に型のきまりなし……………136

一四〇	道心體なし……………	一七〇
一四一	一大事といふこと……………	一六九
一四二	水上の雪の如し……………	一六九
一四三	聽聞の心に入らぬ疑に就いて……………	一四〇
一四四	地獄一定と思はれぬ疑に就いて……………	一四一
一四五	願力と心とが離れくくなるといふ疑に就いて……………	一四二
一四六	たのんでも助かられまいかといふ疑に就いて……………	一四三
一四七	信後より立還りて初一念を疑ふ疑……………	一四六
一四八	身の不實より疑を起すこと……………	一四九
一四九	懼慮と疑とは別なり……………	一四九
一五〇	身に覺わあれば疑はざる也……………	一五〇
一五一	信を得ても落着かれると思ふべからず……………	一五一
一五二	先徳出離の道にわづらひ給ふ事……………	一五二

一五三	落着けば動き出す也……………	一五四
一五四	歎きは實なき也……………	一五五
一五五	自然の報謝……………	一五七
一五六	百尺の竿頭一步を進めよ……………	一五七
一五七	お慈悲ばかりあてにするは誤り也……………	一五九
一五八	佛のたねを興へて佛にしてやる……………	一六一
一五九	興へたうても興へられぬ……………	一六一
一六〇	邪見僥慢……………	一六二
一六一	邪見のすがたの事……………	一六三
一六二	あたりまへの一言、佛教儒教を反古にす……………	一六四
一六三	道徳は泥道を行くが如し……………	一六五
一六四	安心消息……………	一六六
一六五	我心に騙される所……………	一六七

一六六 世に紛れて竊に往生する人あり……………一七三

一六七 浮世の喜びと佛法の喜び……………一七三

一六八 何を以て助るか……………一七三

一六九 明にそみくせぬが業報ぢや……………一七三

一七〇 知りつゝ墮るが業也……………一七三

一七一 我心が知れぬ也……………一八二

一七二 自身の業報を觀すべし……………一八二

一七三 機の六字、法の六字……………一八三

一七四 道理にはづれた所が聞けぬ也……………一八五

一七五 自力を捨て、他力に歸する相……………一八六

一七六 守株は危し……………一九〇

一七七 有難う思はれぬが業報也……………一九二

一七八 冠履顛倒……………一九二

一七九 怖るべきは増上慢也……………一九四

一八〇 後生の願はれぬ障の事……………一九七

一八一 我後生の疑晴れ悪き所以……………一九九

一八二 機を歎くは未だ我機を知られざるに由る……………二〇一

一八三 願はれぬが業也……………二〇一

一八四 自ら欺く……………二〇四

一八五 養わこじけの信心……………二〇六

一八六 法味飽くことなし……………二〇七

一八七 疑ひのつまらぬこと……………二〇八

一八八 まことに聞かぬ事……………二二一

一八九 死ぬことを急げではない、信心をいそげくどの
たまふ……………二二三

一九〇 時を失ふ莫れ……………二二三

一九一 いそげくと仰せらるゝ思召……………三三

一九二 信心は出立也……………三四

一九三 たい今生にあり……………三五

一九四 勵み求むるは自力に非ず……………三六

一九五 懈怠に打ち驚ける時……………三七

一九六 未信に懈怠あり……………三八

一九七 大山を見ず……………三九

一九八 やすく聞かれる御恩……………三九

一九九 よく聞くこと……………四〇

二〇〇 求めて聞けよ……………四一

二〇一 聞くに骨折るべしたのむに骨折るべからず……………四二

二〇二 力を入れるべし、入るべからず……………四三

二〇三 身を捨つべし……………四四

二〇四 聞くも他力也……………四五

二〇五 本願の本を聞くべし……………四六

二〇六 疑ふ心のなきが信心也……………四七

二〇七 吾祖の持言、元祖の御心……………四七

二〇八 五劫の御思惟……………四八

二〇九 朝暮の「正信偈」は、名號の謂れをお聞せ下さるゝ也……………四九

二一〇 耳で聞け……………五〇

二一一 聞く一ツが修行也……………五一

二一二 矣……………五二

二一三 人なみのこと……………五三

二一四 人は悉く悪人なること……………五三

二一五 苦を怖れて而かも苦を好むもの……………五四

二一六 たのむといふことが判り兼る理由……………五五

三二七 判つたやうで判らぬ一念……………三六

三二八 片づけて置く心と疑ひなき心と紛らかして居る也……………三七

三二九 任せたに非ず棄てた也……………三八

三三〇 臆を攫むが如し……………三九

三三一 他力信心……………四〇

三三二 疑なきがたのむなり……………四〇

三三三 罪は悉く助かる也……………四〇

三三四 秤の低昂……………四一

三三五 一念とは一心也……………四二

三三六 一念の時……………四三

三三七 往生の定まれる時……………四四

三三八 信心歡喜……………四五

三三九 疑ひ晴れた一念……………四六

三三〇 手早き也、佛のなしわざ也……………四七

三三一 業が断れて喜ぶ……………四八

三三二 功德身に滿つる事……………四九

三三三 因小果大……………五〇

三三四 後生一大事といふこと……………五一

三三五 一大事の思ひに別體なし……………五二

三三六 言別にして體同じ……………五三

三三七 閱牆の論……………五四

三三八 たいの御助けといふこと……………五五

三三九 「改悔文」の通りぢや……………五五

三四〇 悪知識……………五七

三四一 悪引導……………五七

三四二 紛れるといふこと……………五八

二四三 紛れて苦しからぬこと……………二五九

二四四 紛れてならぬこと……………二六〇

二四五 名利勝他……………二六一

二四六 むつかしいことではない、易く吞込ませうとて
タノム信ズルといふ……………二六四

二四七 法水毒と化す……………二六五

二四八 吟味しどころ……………二六六

二四九 タノメとのたまふ事……………二六七

二五〇 仰せに随へば樂なもの也……………二六八

二五一 理屈にくゝらるゝ事……………二六九

二五二 おちつかぬが疑ひ也……………二七〇

二五三 胸で料簡つけて居るが計ひ也……………二七一

二五四 良薬口に苦し……………二七二

二五五 後生大事とは能く聞く心になりたこと也……………二七〇

二五六 好きこそ物の上手なれ……………二七一

二五七 蛇の生殺し……………二七二

二五八 煩惱は心の底から起す事……………二七三

二五九 嫌ひでないが仕合也……………二七四

二六〇 我心にたまされる事……………二七五

二六一 求むる者は得ず……………二七六

二六二 危うかりける我身也……………二七七

二六三 一心歸命の要義……………二七八

二六四 就行就人の立信……………二七九

二六五 信心の體……………二八〇

二六六 火打石……………二八一

二六七 佛境界……………二八二

二六八 佛身不思議の事……………二六八

二六九 佛聲……………二六七

二七〇 見如不見……………二八九

二七一 稱名……………二九〇

二七二 しつかりと受けられぬ……………二九一

二七三 信と行……………二九二

二七四 後生助け給への言の出る所以……………二九三

二七五 三業惑亂……………二九五

二七六 母の前に在る盲兒……………二九六

二七七 六字のかたみ……………二九七

二七八 與へるが即ち御助け也……………二九八

二七九 名體不離……………二九九

二八〇 佛體即行に非ず……………三〇〇

二八一 たのめるが肝要……………三〇一

二八二 祈淨厭穢……………三〇二

二八三 旅立ち前の心……………三〇三

二八四 面白やく……………三〇四

二八五 微細な疑ひ……………三〇五

二八六 教に順ふべし……………三〇六

二八七 思惑ちがひ……………三〇七

二八八 所歸即行……………三〇八

二八九 心は業報だけよゝ起らぬ也……………三〇九

二九〇 溝が違へば落ちぬ……………三一〇

二九一 小兒正月を待つ……………三一

二九二 極樂……………三一二

二九三 此度仕おほせばや……………三一二

二九四 聞わた外に信心はない……………三二五

二九五 若存若亡……………三二六

二九六 老尼への消息……………三二八

二九七 能く／＼案すべし……………三二九

二九八 骨折るべきこと二ツ……………三三一

二九九 六時禮讃提要……………三三三

三〇〇 生死の大夢……………三三四

三〇一 鶏鳴……………三三六

三〇二 荒れたる宿に泊りたるが如し……………三三七

三〇三 旅のなごり……………三三九

三〇四 勝を千里の外に決す……………三三〇

三〇五 苦患の娑婆で嬉しいの聲が出る也……………三三一

三〇六 道連れは追剥ぎ也……………三三二

三〇七 信の上の稱名の事……………三三四

三〇八 たもち稱へる事……………三三四

三〇九 三祖御諭の事……………三三四

三一〇 信の上の報謝は勵むべし……………三三七

三一 忘れてならぬ事……………三三六

三一二 大恩は知りにくい事……………三三〇

三二三 是心不顛倒……………三四一

三二四 杜鵬……………三四二

三二五 佛恩報謝をつとめる巧方便の事……………三四二

三二六 忘れられること、忘れられぬこと……………三四四

三二七 念佛の行者……………三四四

三二八 口も心も一ツ也……………三四五

三二九 大樹の蔭の如し……………三四六

三三〇 是で助からねば衆生が佛を捨てる也………
以上

龍温語録

大須賀秀道編

一 我が心



聞けばさくほご、廣大なるものは、如來の大悲心。思へば思ふは、惜まものはわが心。この仰せに隨はぬとは、我身の怨也。我身を惜むものがあるとても、必ず人をは惜まぬやう、惜まものはわがこころぢやほごに。
さりながら、我心が我心のまゝにならぬなり。

二 お直しにあづかるこいふ事

心中を御直しにあづかるこいふことは、信心を削つたり、足したり、繕ふたりして、直すことではない。たゞわが機のフリムキ違ひを直すことぢや。

信は佛より、すぐさま御あたへ也。

三 方向轉換

西へ行かうと思ふものを東へ導き、東へ行かうと思ふものを西へ導くから喜ばぬ。西へ行きたい者を西へ導けばヤレ嬉しやくで従ひ行く。然れば西へ行きたいと思ひ乍ら、方角違うて東向きになり

てゐるのを、西へ振り向き直した様なもの。

錢笠も元の儘、雨風も元の儘、振り向き様一ツで西へ行かると、我々も煩惱悪業の錢笠も、五濁悪世の雨風も、信心得ぬ昔に變らねど、振り向く心は大違ひ、此儘乍ら御助けとなりて見たれば、唯進み進んで喜ぶばかりぢや。

四 攝取の力

わが心に、生々にそみついた恩愛の心さへもかはるのに、御あたへの信心は、攝取の力にて、かはらせぬぞと仰せらるゝ。

五 一つことを、能く聞く事

法の道理は、たゞ一遍できこねる謂れに御成就。きいてもく聞ぬは、わが業のなしわざ。

それ故に、別々のこときくではない。たゞ一ツいはれ、同じことを、わがはらわたにしみ、たましゐにこたへるまで、よく聞けよく聞けとのたまふ。

六 往く心になれば、往き易し

いよく墮る機にもなれぬもの、又いよく極樂へ参りたいと、ゆくころにもなられぬもの、ゆく心に入れば、ゆき易き淨土ちやとのたまふ。

七 何もかも忘れて、嬉しうなる也

聴けどもく往生一定のころになりかねるは、あなたの仰せをよくきかずに、わが心から疑ひをこしらへるからちや。後生が大事とおもはれぬ。又心がかはる。又物が覺えられぬ。又喜びがおこらぬ。又求めるころが、浮世のことほど進まぬ。又信を得たら、かうでもあるまい。云云

これらが、みな忘れられて、御助けが嬉しうならねばならぬなり

八 聞法飽くなし

長者不飽富、貧乏人のおもはくとは違ふ。きくても、きくても、

きゝたくなるなり。

下戸は酒を鹿抹にする也。

九 寸長く尺短し

△禪語に「寸長尺短」といふことあり。思ひくらへひとつにあること。

△わが身を地獄へおとすタチつくるにさへ骨折ること。

△病があれば、我子のからだに灸すゐてやること。

△世間には無駄骨を折るといふことがある。この佛法ばかりは、みな我身につく徳なること。

△願往生無量樂〜といふは、死んでの後の極樂をまたずして、信

心の中の樂みのこと。

一〇 聞

一ツことを、わがタマシキへ、しみこむまできかねばならぬ。

一一 信心正因

タノムといふこともなしに、助けて貰ひたいといふは、因なしに生れたいといふことになる。信心得ねば地獄ぢやと仰せらるゝ。

タノムといふは、今日世上でつかふ詞とはちがふ。父母をたのむも、力にしてよりかゝることなれども、今は初め發起せる一念が、タスケタマへでなければならぬ。

これは今日まで、親さまとしらす、疑ふたからのことなり。

三 聞きやうに狂ひあり

走るべき戸の走らぬやうになつたのは、鴨居か剛に狂ひがあるに違ひない。

いかなる胸にも滞りなう屈くべき道理に成就なされたこの御法が屈かぬといふは、聞きやうに狂ひがあるからぢや。

三 よく／＼生起本末をさくべし

まいても／＼後戻りして、この心ではどうぢややらといふ心が起り、推つけてみても、こゝろすみがせぬ。それがモトをさく／＼つけぬ

からぢや。

本願のおこりをよくきけば、疑のはなれらるゝといふは、もこそをきいてみれば、よく／＼吾機の間には合はぬといふことが知れて、わが心がすたるゆゑぢや。心のすたるといふが、計ひのなくなりたことぢや。

本願の本末、つゝむれば、慈悲の一ツ也。

一四 大悲の廻向

きく身に生れたも、大悲の御めぐみ。きく心になりたも、大悲の御めぐみ。信心の體は、もとより大悲の心なれば、大悲を離れたこととは一ツもない。

一五 命は法の寶

凡そ世間において、寶といふは、金銀財寶、高位高官、智慧辯才といふもの。然るに貧には金の寶はない、賤には位の寶はない、愚には智の寶はない。法をきく第一の寶は命ぢや。その命を今日持つて參つたが、めいめいなり。

一六 隣の寶

終日數隣寶無半錢分、大福長者の傍にすんでおるものが、この家にはこれ程の金銀がある、田地がある、みな聞き知りて、口で

いうても、わが寶にはならぬ。

みな人ごとに、佛法を覺けたがれども、覺けたは問にあはぬ也。

一七 味を知れる鮮し

中庸に人莫不飲食也、鮮能知味也とある、例へば茶の湯を知らぬものに、茶をたてゝ飲ませ、又心なきものに珍らしい料理を食はせたりやうなもので、たべさせたらたべぬものはあるまいが、ワケなしに胡椒丸呑では、味知りたといふものではない。

只今この御法をきかぬもの、日本中にあるまいけれど、その味を知るものは甚だ以て少ない。その味といふは、凡夫が直に佛になる味ぢや云々

一八 歡喜の源泉

後生大事とふりむいても、御慈悲は容易にきつかけぬることぢや。

後生大事となりて、案じるも苦にするもよけれど、たわが胸の善悪にのみ眼がついて、ごうも喜ばれぬくと、吾胸ばかり穿索する。ナンボ胸を穿索しても、凡夫の胸から喜びが出る道理はない。それゆゑに聞其名號と仰せらるゝ也。

一九 珠玉を吐くが如し

口稱佛名如吐珠玉、口から蛆の出合をやめて、ころりく眞珠ち

やの珊瑚珠ちやのと、玉の出合をするやう。

たい世間の咄でも、タント浮世のこといへば、あたりさばりの出来るもの。たい湯をのむやうでは答へぬ。あたれかしと思つていふたら、嫁がきけば、姑がおもふたより、なほきつくあたる。それを蛆を出すのちやとのたまふ。若この座敷へ蛆が出たら、たれつかむものはあるまい。又珠が落ちて居たら誰でも拾ふであらふ。

二〇 心和らぐべき也

業煩惱が和がねば、信は得られぬ、聞く心にならぬ、参る機にならぬ。それ故に大悲の光明を以て、照し和らげて下さるゝなり。されば信を得たる上にも、煩惱具足といひて、頭数は揃うて居れ

ども、たい心が和ぐばかり。凡夫ちやによりて、慾もおこし、腹も立てども忽ちにやはらぐやうになる、その味ひがちがうなり。

二 求道心

やつと這ひ廻る子でさへも、眼の前によきものみせると、かなはぬからだで、どうでも取りたいと思ふ。このわけが判つたら、この信心とりたいて、おもはぬ筈はない。

三 六字に懺悔の徳あり

若、富士の山を崩せといはれたればとて、いかなるものも崩さうとは思はれぬ。大海もそのとをり。然るにわれくが、十惡の一ツ

一ツが虚空にもみち、大海の如くちやともある。

自力の人々は、懺悔に懺悔の功をつみて、段々その罪を滅して悟り給ふ。然るにわれくは、タノム一念にみな消ゆると仰せらるゝ親にも子にもいはれぬ罪を、みな發露と口にいはねばきこぬといはれたら、さぞかし悲しからう。それを南無阿彌陀佛に、みな懺悔の徳をこめて與へ給ふ。その罪の消ゆるさへも、廣大なことちやに罪を消して力の及ばぬ淨土へ參らせて下さるゝは、何故ぞ、五劫永劫に御修行なされた南無阿彌陀佛の力ゆるちや。三世の諸佛にさらはれたも、この罪ゆるであつたが、今は恒沙の佛にほめらるゝ。

三 念佛の大益

「要集」下本(十一)引阿彌陀思惟經云、「若轉輪王千萬歲中滿四天下七寶布施十方諸佛不如一彈指頃念阿彌陀佛」

「黒谷傳」九(三)右云、「念佛にもうき人は、無量のたからを失ふべき人なり、念佛にいさみある人は、無邊のさとりをひらくべき人なり」。

二四 迷へば東西俱に失ふ

天台大師の語に、如人迷故謂東爲西則東西俱失といふことありさてよそへ行いて、一宿すると、方角を取違へて、こちらか東ぢやと思ふ。なんぼ思い直しても、其がなほらぬ。我心でこちらは東ぢややと思つてゐる。その家へ入ると、又西を東の方に思はれてならぬ

僅に一遍とりちがへた方角でさへ、中々なほり兼ね、我等は無始已來の執心ゆゑに、中々除かぬも尤なことぢや。女は女の所作、生世々にくせづいた身の上が、迷ひといふことぢや。

二五 蟹の手を蕩されたるが如し

禪語に如落湯螃蟹七手大脚と言つて、蟹の手といふものはボロボロと落る性分のものぢやが、其をば一本二本蕩されては、八本もある故にヤハリ横に這ひ廻る。然る所を段々と七手八脚残らず蕩されると、ホンの手なしになりてモウ動かれぬ。

これ禪宗の悟を開くに、兎角此妄念が止まりかねて、いろく迷に馳せる所を知識に打はなされて、右へも左へも手を出さぬ

様になりて、本来不生の面目をさとり開いたといふことばの意ぢや
 これは禪宗の取方、今日我れくが聴聞し開いて落着いたも其通り
 タ、南無阿彌陀佛ノコ、ロナリト落居スベキモノナリと御勸めなさ
 る、けれども、中々ツイ落居は出来ぬ。右へも計ひの手を出し、左
 へも計ひの足を出して、一本でも残餘のある間は、邪見の横道をせ
 うといふ我等が心、兎角に自力の手を出しては計ひの止められぬ凡
 夫、善知識よりあちらの手を落され、こちらの手を離されて、ホン
 ニ蟹の手を落されたやうちやといふが、今は動くに動れず、計ふに
 計らはれず、丸々の他方にして下された。

二六 恩にもうけること也

善知識の、「恩にもうけるほどに、信を取りてくれよ」このたまふ
 は、幼ない子が、あぶない所を這ひ廻るやうに思召、もし取損じた
 ら、あなたの方では、諦めるたねはましますぬ。それ故に、恩にも
 うけると仰せらるゝのぢや。

二七 口と心、耳と心

この佛法聴聞の人は、口癖のやうに、落ちねばならぬ、死なねば
 ならぬといふことなれども、心には實におもはぬ。それ故に耳にき
 けども、心がきかぬなり。

二八 疑ひと愚痴

疑ひといふは、いよく旅立つ身になりて、行かれうかと思ふが疑ひ。

たゞ方角も知らぬのは、愚痴の煩惱也。

二九 お興への信心

信心ほごめでたきものはない、或は玉に譬へ、或は手に喩へ、或は母に比へ、もろくの功德を産み出す。佛法大海信爲能入、然るに此信を成就するが一萬劫の修行ちや。今は信心を興へるぞと仰せらるゝ。御興への信心なれば、あらゆる功德はこめて興へるぞと仰せらるゝ。御興への信心なれば、口も心もひとづちやと仰せらるゝ。

三〇 一稱一念知られざるはなし

「和語燈」六(十七)云、「極樂世界を莊嚴したて、御目を見廻して、我名を唱ふる人やあると御覽じ、御耳を傾けて、我名を稱する物やあると、夜晝きこしめさるゝなり。されば一稱も一念も、阿彌陀佛に知られまいらせすといふことなし」と。

三一 眞實が届けば疑晴れる

今日世間のことでさへ、向ふのマコトが届けば、こちらの胸の疑は晴れる。

御慈悲の御心底が判りたら、疑うてはゐられぬ、四大海の水ほど

の生血をしぼりて、疑ひを晴れさせて下されたのぢや。

三三 一念にタノメの事

一念にタノメと仰せらるゝは、雜行すてゝ、一心一向にタノメとのたまふと同じこと。一念の時尅をおぼれておれ、おぼれてたのめとのたまふことにあらず。

三三 希望

一生雖盡、希望不盡とは、恵心僧都の御名言で、こゝが樂になりたら後生願はうか、この望をかなへたらば、御聽聞に精出さうかと思はるゝ。されば命があればあるほど、望は多くなるとも少くはな

らぬ、仍て覺如上人は

けふばかりおもふこゝろをわするなよ

さなきはいとりのぞみ多きに

家は貧しくとも餓鬼道にはまざるべし。思ふことかなはずとも、地獄の苦にはくらぶべからず、只今〜ととりつめて、せつない中からも、心がくべし。

三四 轉倒の凡夫

ねがふてもかなはぬ浮世の願ひは、事與願違とあり。小さきことは願ひてもかなはぬ。佛になる程の大ごとは、願へば誰でもかなふ願へばかなふ大事は願はず、かなはぬ小さいことを願うて居る。

それゆゑに顛倒の凡夫ちやと仰せらるゝ。

三五 わが身を呵すること

妻や子や、手代番頭などを叱るものは多いが、わが身をしかるものはない。菩薩修行の時には、たびく身を呵して、身をすて給ひた。それは元より及ばれぬこと。彌々後生を大事にしてくれぬ我身と氣がついたら、憎きものはわが身、御報謝大儀に思はるゝ、憎きものは我心なり。

三六 一人くゝの凌ぎ

わが身くゝの一大事の後生を、一人くゝのシノギと仰せらるゝ。

シノグとは、「しとげてのこ」といふことなり。

成程大事なことちやとまでは思つてみるが、いよく大事のかるといふ人が、なか／＼以て少ない。

大事といふは、大きなことちや、サア町内から火が出たといふたら、小さい仕事は、邪魔にならぬもの、すたれてしまふ。

三七 赤尾の入道、我心に頼む

銘々に機がついたならば、我心をたのんでなりとも、起さねばならぬ、今度こそは心を師とするなよ、心の師となれよとも仰せらるる。

赤尾の入道は、我心をたのまれた。その思ひになりてみれば、法

水が胸に流れ入りて下さるなり。

疑ひの垢は脱ちねばならぬ。ドコ〜までも洗ひ上げて貫はねばならぬ。無上大利の大儲けすることなれば、耻かいても徳をさらねばならぬ。

三八 因縁

「大論」九(十九)天竺の舍衛國といふは、佛の最も永く御止りなされ、二十五年の間、御説法なされたる國、その國に九億の衆生ありて、その中三億の家は自ら佛を見奉り、三億の家は佛出世といふことを耳にきゝて目に拜ます、餘の三億の家は、きゝもせず見もせずサツパリ佛の出世は同國にありながら、知らずにしまうたさある。

あふべき因縁なきからのことちや。「法華經」には、悪業の因縁を以て、阿僧祇劫を過とも不聞三寶名とあるなり。

三九 宿善を案じるな、御縁を喜べ

無量百千の衆生の中に、よく〜御縁が深ければこそ、御流汲の身の上となつた。今日の面々に、祖師聖人に御縁のうすき身の上はたいの一人もない。

御開山様に御縁のあつたのが、とりもなをさず阿彌陀如來に宿縁の身の上、後生に大事がかゝれば、いよく疑がはれかねて、たいわが身の宿善を案じるものちやが、この御縁をきいたならば、たい宿縁を喜ぶばかり。蓮如上人は「いかに不信なりとも、聽聞に心を

いれよ、お慈悲にて信はうるぞ」と仰せられた。
宿善なごを案じるではない、御縁があればこそ、きく身になつたのぢや。

四〇 起るは宿善也

是故當發意とは愈々佛の切なる御勸めの御詞、後生一大事のころを起して、信を得よと仰せらるゝ。
これ痛まぬ所へ膏藥ではならぬ。後生一大事の心をば、我心を呵つてなりとも、起さねば聞ぬ。その起るのが宿善也。

四一 法水入らざれば、疑垢脱ちず

「智度論」にも汝如覆器法水不入と、重箱ふせておいて水かけてはナンポ汲みかけても水は容らぬ。水がはいらねば、内のくさみはぬけぬ。

御法の水がトクト腹へ入らぬから、疑ひが晴れぬのぢや。

四二 多ければ價安し

物以多爲賤、雙錢換一束といふは樂天が筈をたべた時の詩。ナンポ善きもの甘いものでも、澤山になれば價が安くなり亀抹になる。京は物の高い所なれども、春になつて孟宗や、この節なれば松茸なごは京には却て澤山で田舎よりも安い。
そこで佛が歎かせられて、此佛法の徳は、牛頭栴檀の如く稀なる

ものなれども、澤山になれば薪にする。今日の銘々も、梅檀を薪にせぬやうにせねばならぬなり。

四三 佛法の大意

(人のもこめによりて佛法の大意をしるす)

夫佛法の大意は、轉迷開悟の四字にして、まよひをひるがへし、さとりを開かしむるといふより外はなきことなり。佛世にいでも八萬の法藏をときへの給ひしは、たいこれがためなり。さてその八萬の法藏に入るには、信の一字なり。信を手にとへ母にたとふるは、この心なり。故にその大要は、佛を信するをはじめとす。およそ佛の佛たる所以をよく心得候は、説置たまふみの

りを疑ひ謗ることあるまじく候。然るにこの佛を信するといふことは、大因縁なくんばあたはざることなり。すべて衆生のころの及ばぬことのみを、とき出し給ふやうなれども、深く衆生の迷をかなしみ給ふより、やむことを得給はず、ときへの給ふすぢは、たい因果のことわりばかりなり。因果のことわりてふことは、佛の作り給ふにもあらず。さとりをだに開きぬれば、明かなることわりゆるに、これを自然とはなづくるなり。自然のことわりを争ふものはあるべからず。

さればわが眞宗の安心とても、自然のほかなければ、祖師は自然といふは他力なりとのたまへり。迷悟善悪、苦樂昇沈、みな自然なり。たとへば麥より麥を生じ、豆よりまめを生ずるが如し、是自然

なり。別してわが眞宗は自然のことわりなり。そのゆゑは、凡夫有漏の迷情よりおこす心ろ、おこす行ひ、もしほとけのたねとなり得るならば、彌陀因位の御思惟もなきことなり。ほとけのたねにあらざれば、佛になること能はざるより、五劫の思惟といふことおこりて、終に阿彌陀佛とよび給へり。然るに阿彌陀佛の因位の大願大行は、今日のわれらに、佛のたねをあてへて、佛にせんがためなりけり。法然聖人、永劫の修行は何の料ぞ、功を無善の凡夫にゆづることたまふもこれなり。

さりながら、縁なき衆生には、ほとけもあてへ給ふことあたはずこの佛の大慈悲にへだてはなければども、みなおのくの自業自得にて、佛のあてへたまふを、わが心にうること能はざるなり。こゝに

われら、宿縁にもよほされて、このみのりにあひ奉り、諸佛稱讃の名號をきゝうるとき、即大悲のめぐみによりて、うたがひのこゝろなくなりたるを、信の一念とは申なり。そのきゝ定められたる心はおのが心にあらざれば、これ他力なり。わがこゝろのすたれたるとき、わがはからひなくなりて、佛の悲願力はじめてわがこゝろのそこにといきたまふより、佛の誓願力に乗託することゝ一ツとなれりこれを信の一念といふ。これはこれまでの佛法通途の信にたちこねたる他力廻向の大信なり、故に佛心凡心一體ともなづく。歸するところは、宿縁といふも光明といふも、佛の御なしわざ、きくも他力よりきくと候へば、わがものゝひとつもなき、もはら他力とはまふすなり。返すくもわが眞宗には、佛智廻向の法門といふと最要也

四四 信は得ずとも先づ喜ぶべし

我身を思はぬものはないが、此世の我身思うて、未來の我身を思はぬ。

これが迷ひといふもの。この一生と未來の永劫とくらべたならば塵一すぢと、須彌山よりもまだ大ちがひ、それを此世を大さう思ふが迷也、迷の顛倒也。

信は得ずとも、聞く身にして下された仕合を、喜ばねばならぬ也

四五 法爾の道理

名號のいはれが信心。名號のいはれがわれくが助かるいはれ。

名號のいはれが、慈悲のいはれ。名號のいはれが、他力のいはれ。

名號のいはれが、タノムばかりで往生さだまるいはれ。現生に不退

をうるといふも、來迎たのまぬといふも、みなこもりてある。どう

してこもるぞ。五劫の御思惟でこめさせられた

それが法爾の道理ちや、法爾の道理といはれ、モウ疑ふことはな

らぬ、法爾の道理といふが、自然の道理、これが容易く聞きつけら

れぬ。「略文類」の結文に、縁願力、廻向、聞眞實功德、獲無上信心、

則得大慶喜、獲不退轉地云云

四六 御慈悲の我物になる事

名號も御慈悲のかたまりなり。光明も御慈悲なり。宿縁も御慈悲

なり。至心信樂の信心も御慈悲なり。それがたい、向うへかざりたてた御慈悲では助かられぬ。

今善知識にあひて聞く一念に、いりみちて下され、いたり届いて下されて、わが物になる。その時に、疑ひ計ひもつきはて、無明も破れ、業もきれ、罪も亡び、功德も得れども、凡夫の方は、たい樂と嬉しうなるばかりなり。

四七 きゝうる事

今この大經に聞々と仰せられたは、たいきくことにあらず、きくて信すること、それを紛れぬやうに、きゝうる、きゝひらく、よくきくと仰せられたものぢや。

御開山已來、よくきくくと仰せらるゝ。耳に聞いたばかりでない、心のうたがひのなくなりたことで、心にきゝつけたことぢや。

四八 あやまぢの事

この世のことは、五十年六十年の孫子の末までのことを思案する智恵もちながら、今晚死ぬる我身のゆくすへをかまはぬやうな過ちはない。

又一寸さきのしれぬ吾胸で、大きに御慈悲をはからふやうな過ちはない。
正直を信せず、邪偽を信するやうな過ちはない。

四九 疑起す人少し

疑といふものは、流轉のきづなにして、これほど恐ろしいものはない。

然るところ、この疑は、往生に望みがおこらねば、疑はおこらぬそれゆゑに、疑のおこる人さへも少ない。おこる人さへ少ないから、晴れた人は猶々少ない、夫れちやほとに云

五〇 疑のはらしやうの事

疑ひ起りたら、モウはれる下地。花がさいたら、果はみのるほごに、なほ張合ようさかねばならぬ。

去りながら、その疑がおこりたら、それを我力ではらそう、我力で信じやうといふ計ひなく、その疑のあいてにならずに、よくさかねばならぬ。

その疑のなくなるまで、よくさけ、光明にも除疑の徳あり。名號にも除疑の徳あり、光明名號の父母のちからより、外に疑のはらしやうはない云。

五一 疑晴れる遅速の事

いよく後生が大事になりてみれば、はれがたきものはこの疑ひ、疑がおこりてからはれるまでに、永うかゝるもあり、早うはれるもあり。未だ疑のおこらぬものは、いつまでかゝるやら知れぬ。

疑のおこりてから、信をうるの遅速が、宿善の遅速ぢや。そこを
已今當ともたたまふことぢや。

五二 疑を御化導の杖で打出して貰ふ事

疑ふなと仰せらるゝから、終に疑ふたことはござりませぬといふ
それは疑晴れたではない。また疑に手のかゝらぬのぢや。
疑のありだけは、御化導の杖で打出してもらうたのでなければ、
晴れたではない。左もなければ、臨終にその疑が出るほごに云

五三 疑は信のウラハラなる事

疑と信とは、ウラハラなるもの、信のウラが疑ぢや。

仍て蓮如さまは、「聖人一流ノ御勸化ノオモムキハ、信心ヲ以テ本
トス」と仰せられ、又「コノオモムキヲ、ウタガヒナク信ゼヨ」と
仰せられて、名號の謂れをのべ給ふ。
御開山は「信ズル」とのたまひ、蓮如さまは「タノム」とのたま
ふ。別のやうに思ふは、大なる誤也。

五四 疑ふものからの事

かの禪宗などでは、疑へ〜、疑團を求めよ、遂には通身疑とな
るまで疑へというて、疑を求めたもの。それが初めは疑がおこらぬ
終に火坑に脚をいれる如く、一寸もすゝまれぬ疑が起るなり。死ん
だものゝ活き還る如く、疑晴れて喜ぶと、禪宗では救へる。その信

するのは、わが心を信ずるのぢや。これ佛性佛心即心即佛と信ずるのぢや。淨體顯彰するによしなし。あなたの大悲心をもらうのぢや

五五 自力の離れぬ間は疑晴れぬ事

世間の疑ならば、あの人の言葉は、ウソであらうかマコトであらうかといふが疑也。ウソではないと思ふが、疑のなくなりたのなり今佛智を疑ふ疑は、さうではない。たとひ佛の御ことばに間違はないと思つても、自力の離れぬ間は信じたではない。それを諸機の淺信と仰せられて、今深く信ずるといふは、その自力の離れたことをのたまふ。他流の二萬三萬念佛申す人が、佛のことばはウソとは思はぬ。自力のキバリあるのは、佛智をふかく信せぬからなり。そ

れが聞其名號と名號のいはれの、きくやうからがちがふ。それゆゑに、佛願の生起本末をきくと、無有疑心とのたまふ也

五六 疑は無明が根となる事

疑といふは、世間の疑ならば、わけの判りたが疑の晴れたのぢやこのたび往生の疑は、たいわけのわかりたのではない、そこを無明由在と仰せらるゝ。たい心の昏い無明が根となりて居る疑なり。わけがわかりて心が昏いゆゑに、せうことなしに延しておく。そこからいろ／＼と疑を自らおこすなり。

疑はみな自らおこすなり。雲霧日月をさへる、みな地より出でて天にはなきことなり。中には自らの不實から、火の坑へかけこむも

のもある。不忠の家來が、自ら欠落するやうなものぢや。

五七 臨終のこりつまらぬ心なる事

つゐにゆく道もいまはのどきなれや

ひつじの歩み身にぞちかづく

臨終をとりつめてみたら、疑のある身の上は、ありだけ疑も出てしまはねばならぬ。とにかくにとりつまらぬ。それをば若い間は、まだわしは若いゆるぢや、年が寄つたならばとおもへども、いくつになりても同じこと、それが悲しきかなや、生々世々に我身についた煩惱にだまされて居る凡夫ぢやによりて、中々取詰めてサア只今とは實におもはれぬ。

たにおりくは、死ぬる時は味氣ないことぢやとまではおもふ。さりながら、それをば無常觀でもして、無理におもはにやならぬといふのではない。それ故に獨生獨死、せめては獨りゆくことだにおもへ、そこがハヤ後生一大事の捷徑ぢやほどにこの佛の思召。それさへも、賑やかな道中してをることゝろぢや。

五八 我心で願力のたのまれぬ事

いくたびも定めてことのかはるらん

たのむまじきはわが心なり

變り易い我心で、願力のかはらぬマコトが、たのまれう筈はないわが心では願力はたのめぬ。なせなれば、タノムといふが、疑晴

れて信すること。願力がたのめたら、佛にならぬ筈はない。

たい疑を誠め給ひても、その疑が離れられぬ。故に信を勧め、疑を誠めたまふ。

信するといふが、無明のやみの晴れたこと、その晴れたシルシを歡喜で示し給ふなり。

悟つたのちや、明信というて、さとつたのちやとのたまふ。

五九 タノム信ずる事

願力をタノムといふが、願力不思議を信ズルことなり。あなたの願力がたのまれぬゆゑに、わが心をたのむやうになるなり。

たのむ信するが、まだくわかるまいかとて、喩を以て、弘誓の

船にのるのちやとのたまふ。

六〇 我機を欺くも憍慢也

なげくくとおもつてをるうち、いつのまにやら、憍慢におちいる。わが心がよくつて、たのまうとおもふことろちや。

お慈悲のきこゆるまで、きくばかりぢや。

六一 よりかゝる事

よりかゝるといふは、ドウよりかゝるぞなれば、助け給へとよりかゝること。ナニ、よりかゝるぞ、たい願力によりかゝるなり。その願力はドコにましますぞ。正しく名號の中にまします。その名號

はドコにましますぞ、貫はぬうちは善知識の御ことば。貫へばわが心、わが口より外はない。それゆゑに真如一實の功德、萬行圓備の嘉號とのたまふ。

本願の生起本末、つゝむれば名號のいはれなり。

六二 ニツ一ツの思ひ

みな人ごとに、有難うなりたいとおもひ、又覺えられぬことを歎く人多きもの、みな徒事なり。阿房羅刹の手にかゝるが一ツ、七寶蓮臺の上に登るが一ツ、このニツ一ツの思ひによりかぬる。動もすれば、畑の水練といふ風情になる。

六三 啣啄同時

歸命と發願廻向とが一緒にある也。

秋さき長者へ米の無心しておくのと、親が持つて来て今與へたのと、違ふ也。

六四 報恩

恩を受けるものは多く、恩を知るものは少し。恩を報ずるものは、甚だ稀なり云々。

父母の恩さへ知らぬ身なること云々。

浄土へ参る望みのなきものにいふのではない。地獄へはおちとも

ない、どうぞ浄土へ参りたいの望みかへた身の上ならば、わすれてならぬは、この善知識の御恩云々。

六五 募る者、歎く者、口説く者

喜ばれぬを募る者と、喜ばれぬのを歎く者と、喜ばれぬのをたぐどく者とあり。

その募る者は邪見なり。その募るといふは、凡夫ちやもの當り前煩惱具足ちやもの何の喜ばるゝものぞ、喜ばせざるは煩惱ちや、又「喜べ助ケント仰セラレ候」トニテモナク候（御一代記）などゝ得手に取るこれを邪見といふ。

又歎く者は、これまことに歎くのなれば、少しづゝ手は上る。然

るを多く歎くのではなうて、口説くのおちや、これはホンマに喜びたい心もなうて、たい言ひ並べて居る。其口説く心が、喜ぶには及ばぬ、たい助かるというて貰ひたき心ろ、甚だ誤也。

六六 改めるより信心の手は上る也

改めるといふは、思ひ換ることなり。思ひ換るといふは、此方の思惑と異うたことを、お聞せに預る時、あなたの思召の通りに心も思ひかへて、我が思惑をやめて遷ることなり。左なければいつまでも聴聞の手の上るといふことはない。

罪が苦になりてあつた處に、罪は障りにならぬと仰せられたならば、こちらの思惑は苦になる、あなたの思召は苦にならぬ。苦にな

りた思惑を止めて、苦にならぬと仰せらるゝ思召に遷ること。其をば苦にして居る所を、苦にならぬと仰せられても、聞いて仕舞へば又苦にして居る、其故にいつも同篇ぢや。

譬へば手習をするに、向ふに手本控へ乍ら、手本は手本にしておいて、我が手ではモトの字癖筆癖を書いて居たら、いつまでも手の上るといふことはない。

六七 法を得手に引く

「沙石集」に「昔、彌陀の本願の手強きこと見せると言うて、殺生するところと、念佛申す所とを、一幅の掛物にし、念佛する方には何事もせず、殺生する方には光明のさす所を書いて開帳した。時に日

頃殺生好きな者それをよいことにして、愈々殺生して、悪を増長した」と無住は歎かれた。

これ法を得手に引きて、勝手にまはるといふなり。

六八 樂屋と舞臺との取違へ

佛法の御座で御聞せに預るは、これ物を習ふなり。然れば狂言に喩へていはは樂屋ぢや。又我家へ返りて五倫六親に交るは、道を行ふのぢや、これ舞臺なり。

然るを皆が樂屋と舞臺を取違へて、御座へ出た時を舞臺の様に思ひ、晴れがましよう考へて、吾家へ歸ると樂屋のやうに思うて、ドウデモよいといふ心ろ、大きな取違ひなり。云

六九 聞き心、向ひやう、得る相

淨土眞宗の安心の至極は、「聞其名號信心歡喜……………」

△聞き心、聞きやうは、「設滿世界火……………」

△向ひ心、向ひやうは、「子ノ母ヲオモフゴトク云云」これが後生を願ふ願ひやうと思ふべし。

△得るすがた、もらう容子は、光名號の因縁ぢや。

われ／＼が手の入ることでもなし、力わざにゆくことではない。

七〇 聞き心に種々の誤りあり

我等が種々のあやまりといふは、先づ迷といへば死の後のやうに

思ふ、死んで後に道の二筋もあるやうに思うて居る。

危ない場所を死場において、死する時が危ないと思つて居る。それ故につまらぬ所は、死んでみねば知れぬといふ落着なり。

其故にいつしか助かり場が死ぬ時になる。斯ういふ心で聞いて居る故に、いつも／＼聞ねぬのぢや、是れ聞き心の誤り也。

その上如来に向ふ我が心が、いつしか我心を善くして助けて貰ふ心ぢや。これ聞き初めより、我心でたのむのではないと、飯の上の蠅を逐ふやうにいはれても、いつしか／＼この心になる、こゝを能く聞かねばならぬ。

七二 誤りとは不急を急ぐ也

七二 誤りとは不急を急ぐ也

「徒然草」に、「あやまりといふは、他のことにあらず、速にすべきことをゆるくし、ゆるくすべきことをいそぎて、過ぎにしことの悔しきなり」云云。「然世人薄俗共諍不急之事」云云。「古墳多是少年人」
寒山の句なり「徒然草」
次前に引之

七二 名號は御回向の事

五乘院師の教化に「如來回向といふは如來より衆生へ下さるゝ。その下さるゝ相と貰ふ相は、どうしたもののぢやといふに、これがまことに肝要なることなり(安心領解の定り處、吾往生の定り處、正定)。その下さるゝにはどうして下さるゝ、たゞ一口の南無阿彌陀佛の名號として下さるゝなり(如來にあらゆる功德善根も、光明も智慧も、神通も、教行信證も、往還二種の回向も、みなここへ)

何もかもスツバリと南無阿彌陀佛の六字へ封じこめて名號としたまふ。

(一年の耕作をなかりはりてはたらき、候の中へ米を入れてさらすに喰ふべし)

それを行者がどうして受取るなれば、十方諸佛の讚嘆したまふ其名號を聞きて、あなたの光明の縁にめぐまれ、宿善開發の時至るとその南無阿彌陀佛の其儘で南無阿彌陀佛と信する、南無と一心に側目をふらす、あなたに縋り奉るものを、他力回向を以てその儘で御助けと信する、そこが南無阿彌陀佛の六字を下さるまゝで、ソツクリと御貰ひ申した相なり。(天正八年記云、我チタスケ給ヘル矣チ即チ南無阿彌陀佛ナリト心得テヨロコブカカリ)

十聲でも一聲でも、我願力を疑はず、念佛するものを必ず間違なく迎へとらんとあるが、阿彌陀如來の大悲の根本なり、故にたゞ一

の名號で、信も行も一時に御貫ひ申すのぢや。

七三 爲の一字須彌山より重し

一切、恐懼爲作大安、本願のおこりといふは、たいこの一句。この一句の中でも、「爲」といふ一字、まことに須彌山よりも重し。大悲といふも、この一字より起る。五劫永劫の御苦勞もこの一字より起る。

親の辛苦はたい子の爲め、我身を忘れて子の爲めを思ふは、たい親ばかり。妻が夫を大事にするも、半分は我身の爲め、家來が我主人を大事にするも、半分は我身の爲め。丸々子の爲めを思ふは親ばかり。

因にいふ。この爲といふ文字は、猿が我子を抱きたるかたちをとりて作りた文字ぢや、これ象形の字なり。古、唐土で蜀の國へゆきて歸る時、猿の子を捕へて船にのせて歸りたれば、その母猿が二十里の下り船に追ひかけて來て、船が岸につくなり飛込んで死んだ。その腸が寸々に裂けてあつたとのこと云云。

七四 一人たりともいふ本據

「往生要集」三(七右)に、「大般若經云、十方世界無一有情如來大悲所不能照。寶積經云、假使過於恒河沙等諸佛世界唯一衆生是佛化限。爾時如來躬往其所爲說法要令其悟入。常に一人たりともと仰せらるゝは、これがため也。」

七五 我身一人のため引受けらるゝ所以

「聖人ノツチノオホセニハ、彌陀ノ五劫思惟ノ願ヲヨク／＼案ズレバ、ヒトヘニ親戀一人ガタメナリケリ」

これはいかなることぞ、聖人即ち彌陀の來現、それなれば、如來が直に御手本この通りに受けてくれよと仰せられる。然るに世上の理窟では、わが身一人とは受けられぬ、實に十方衆生がたすかるみのりちやと思はるゝ。こゝが無碍の佛智、無量の佛智、不思議の佛智ゆるゑに、憚りなく恐れげもなく、我身一人と受けねばならぬ。我身が淺間しさが知れたら、猶我身一人と受けねばならぬ。我身は、天上一輪の月、一人々々に水を出し、一軒々々に盥のやう

な器を出せば、一ツ／＼に丸々の月がうつる云々、譬では影ちや、實は影の映るといふやうなことではない、眞實大悲の御マコト、南無阿彌陀佛となりて丸々宿りて下さるゝ。一人々々に御與への信心その體南無阿彌陀佛、然れば南無阿彌陀佛の中に、五劫永劫の御慈悲はこもりてある。それを丸かぶりに我身一人と引受けることちや、何が不足で疑うて居らるゝぞ。

七六 親一人は思へても、子一人がおもはれぬ

親一人子一人といふことがある。われらが佛に向うても、この親一人はまだしもおもはるゝ。子一人がおもはれぬ。「地藏十輪經」に佛の慈悲をたとへて、如母於一子と仰せらるゝ。

七十七 寶の山に、手を空しくして歸る

「寶の山に入りて、手を空しくしてかへる」といふは、もと爛摩王の阿りの御ことばなること云々
むなしくかへるといふは、今日の吾家へではない。三惡道のすみかへのことぢや。

七十八 螟蛉の子

螟蛉有子蜾蠃負之(詩小雅小宛篇)といふは、聖人の撰んだ詩の辭、今日知るものは知てをる。螟蛉といふは、菜の葉にすむ虫のこと、その子を似我といふ。土の中にすんで居る蜂がとりて、脊に負うて土の中へ還りて、その蟲を抱いて、我に似よくと鳴いて、晝夜に念おる、その蜂の念力で、いつの間にやらシヤンと蜂の子となる。今日虫でさへ親の力で性が變る。

法藏菩薩、我と等しき佛となさずば、おくまいといふ念力で、佛になる縁のなきものが、あなたと等しき佛になるのである。

七十九 願心終不退

「如來會」上(七)縦沈無間諸、地獄如是願心終不退と、法藏菩薩の直々の御言ぢや。

八〇 フカクダノム

「拾遺漢語燈」(第十)、「如深憑本願、口稱名號之爲勝、是則眞實之行」文フカクタノムと世々の善知識の御詞、正しくこの法然聖人の御詞より出づ。この深と即深信の深なり。

わが心を深くせんとかゝるではない。自力を離れて、他力に歸した程の深き心はない。わが計ひのないのが深いのちや。それが機法二種の深信とも仰せられて、わが機を見限ること、見限るといふは二たび間に合さぬこと、對手にならぬことちや。

八二種深信

ふかく信するといふが深信。

機のはからひなきが、機の深信。法の不思議がきこねて、打まか

せたが、法の深信也。

八二極難信

わけのわからぬが、難信ちやと思ふは聞き違ひ也。

極難信といふは、露塵ほども疑ひの心のなくなるが極難信。助かるものが助かるなら、極難信ではない。助かる縁もたよりも切れ果てたる露塵程も出離の縁なきものを、助けまします本願ぞと信するこれが極難信でなうて何とせう。

八三冥加之事

蓮如上人へ、「冥加といふことを存せず」と申上げたれば、「冥加に

かなふといふは、彌陀をたのむことぢや」と仰せらるゝ。然れば如來の加威力でなければ、信心は得られぬなり。

これ程なお慈悲がたのまれずに、空しく地獄へ落ちるのは、よく冥加にはづれたのぢや。

八四 後生たすけ給への事

一類の者は、口にもいはにや安心がたらぬ、心にも覺わがなければならぬといふ。一類はたいお慈悲で御助けといふ。こゝが判りにくい。

たいお慈悲で助かるなら、誰でも助かりそうなものなり。たのまねば助からぬといへば、何ぞ人間の人をめぐむに、最負や偏頗があ

るやうに思はるゝ。又後生たすけたまへとたのむといへば、なんぼにも此方より持ちかけるやうに思はるゝ也。

あなたの仰せの聞けた時が、うれしやと起りた一念、それが即ちたのむのぢやといふことは、どうしてものみこまれぬ云々

八五 目標にすべきもの

向うの目標といふは、大切なもの、グレ／＼動くものは、目標にならぬ。こちらが動く時には、向うに動かぬものがなければならぬ

譬へば大海を船に乗り廻す時は、北極といふ星が目標になる。

我等が心が生死の大海にありて、いろ／＼の風波にさへられて、うごくものゆゑに、法藏因位に立てさせられた本願を、目標にする

より外はない。

八六 言に失なく、心に失あり

一念歸命のいはれ、能歸の相を唯一言でいへば、疑晴れた相が後生助け給へちやと述る。この述ることばには變りなれども、これを後生助け給へを嫌ひなものは、疑晴れたありたけにこもる後生助け給へちやによりて、後生助け給へと言はずともこもるといふ。又後生助け給へでなければぬと慕るものは、疑晴れたありたけ後生助け給へちやによつて、疑晴れたといふに筋は違はぬが、そのありだけの極つた後生助け給へでなければぬと、推すなり是れ一ツ言葉を言うて居り乍ら、言に失なく、心に失あるなり。

つとまる所、他方回向の信をもらはぬからちや、能歸のたのみよりは、すがる思ひといふより外はないが、これを思うて見たり、思ひ並べたりするやうなことではない。

本願信する信じやうは二種の深信、二種信深で信じたのなれば、かうあうの分別はいらぬ。出離に手懸りのつきたものを、助けるための御言の下で起る思ひがすがる思ひなり、よろこぶ思ひなり、まかすることゝなりと仰せらるゝ。たゞ一念に具足することゝらばへちや、「普賢行願品」に、猿の五處を縛せらるゝが如くちやと御諭へあらせられた云

八七 たのみ心の教へやう

天竺には佛が現れて、「南無阿彌陀佛」と説かせられた。それを唐には阿彌陀如來が形を代へて、善導大師と現れ給ひ、唐の文字に直して、「歸命無量壽覺」とお聞せ下された。

其よりこの日本には、又阿彌陀如來が御開山様と現れ給ひ、歸命の二字を釋して「オホセニシタガヒメシニカナフ」ことぢやと仰せられた。命の字が告命勅命といひておほせのこと。歸の字は歸順というて、あなたの御心になうて、順ふことぢやとのたまふ。親の仰せに順ふたのが、まかせたのぢや、夫のおほせに順ふたのが、夫にまかせたといふ。まかせたがよりかゝりたのぢや。それ故御開山が歸命の歸の字を、よりたのむ、よりかゝると御釋しなされた。それを蓮如上人とならせられて、いよく合點しやすきやうに、

ふかくたのめ、ひしとすがりまいらせよ、そのたのむといふは、ごうたのむのぢや、後生助け給へたのむのぢやとのたまふ。然れば後生助け給へといふは、たのみごゝろ、たのみぶりをあらはしたまふ。疑ひなくよりかゝりた上に、別に起すではない、きこねたときまかせられた、たのめたのぢや、そのたのみ心が、後生助け給へより外はない程に、外に心配すなよと教へ給ふばかりぢや。

八八 願行具足と機法一體

願行具足の名號とも仰せらるゝ。機法一體の名號とも仰せらるゝ名號の體に二ツはない。

願と行とがそろはねば、佛になられぬと、聖道門の智者學者が、

此名號を信せぬ故に、善導大師が、六字に就て願行具足の御釋下された。

又機法一體の南無阿彌陀佛とのたまふこと、六かしいことではない。御文にたびく機法一體くとのたまふは、いかなることぞといふに、南無に離れぬ阿彌陀佛、阿彌陀佛に離れぬ南無の二字、それ故にたのむ心が他力なり、如來様から御與への南無の二字ぢやといふことをお聞せなさるゝのぢや。機といふは、阿彌陀佛をたのむ心のことぢや、凡夫の生れつきの機は、わろき機の方をふりすてゝとのたまふ。自力のこゝろぢやによりて、すてねばならぬ。すてるといふは、對手にせず間に合さぬことぢや。凡夫のたのむ心が、佛のたねにならぬ。そこを見ぬいて下されたが、五劫があいだの御思

案ぢや。それゆゑに凡夫のたのまぬさきに、たのむ心をば南無の二字に成就し、たすける法をば阿彌陀佛の四字に成就して、聞く一念にお與への南無阿彌陀佛。あなたの方でも機法一體の南無阿彌陀佛ソツクリ聞さうる一念に貰ふて、見たれば、南無に離れぬ阿彌陀佛南無の二字ばかり貰ふた信心ではない、南無阿彌陀佛を其儘に貰ふた信心ぢやと仰せらるゝ御いはれぢや。そこを名號の主になりたのぢや。南無阿彌陀佛に身をまるめたのぢやとのたまふ。

八九 たのむ一念に願行具足す

たのむ一念にたい佛になる様に思ふ故に、疑ふも尤なれども、たのむ一念にたい佛になるではない、願行を具足するから佛になる。

時に此たのむといふこと、詞でいへばたい一言なれども、此中に願行具足する、これ譬へば蕩樂して身上潰し、諸方から借錢が重りてモウ吾屋に居ることならず、他國へ逐電して跡をかくす、その母がどうぞ吾實子を引寄せたいの心より、段々と金をためてサテ十年二十年も心を盡してサツパリと借錢かたづけて、商ひ出来るといふ様になつた所で、サア来いといふ。その「来い」といふ詞、たい片言にも足らぬけれど、二十年の辛苦より顯れた一言、歸らるゝ様になりたればこそ歸れといふ。然れば歸れの一言には二十年の辛苦がこもる。言は心易けれどとも輕々しき一言ではない。

たのめば助かる道理が南無阿彌陀佛、その助るやうになりたは。五劫永劫の御難行、それ故にたのめ助けるこのたまふ一言にも足ら

ぬ詞の中に願行が具足する、一生が間稱へて助かるではない、御報謝勵んで助るではない、王法仁義守つて助るではない、五劫永劫の願行で助るのぢや。

九〇 稱名信心歸命是一也

唐土に於いて、道綽禪師は、曇鸞大師の没後に現れて、先聖道門淨土門とふりわけて、淨土門の念佛といふは口に稱ふること、聖道門の念佛といふは觀念の念佛。今彌陀の本願は口稱とたてぬきたまふ。それより善導元祖と相承するゆゑ、御開山それに背き給はず、

「トナヘンモノヲムカヘント云云」このたまふ。

そこで信するといふもタノムといふも全く同じこと、それをば信

するといふは信順しんじゆんというて仰せおほせに順しんふこと。タノムといふは、後生ごせいたすけ給へたまとねがふことぢやというて、其そのを互たがひに募もつりて互たがひに嫌きらふ。タノムを募もつりてはシカトたのまねば安心あんしんにならぬやうに思おもひ、又またそれを嫌きらうて信順しんじゆんといふ。「百喻經ひやくぎやうきやう」に、一人ひとりの師匠ししやうが二人ふたりの弟子でしに足をあしをもませたれば、諍からそひて引裂ひきさいたといふ御警おたごへの如ごとく、ごちらも一ひとツの師匠ししやうの身みといふことを知らぬ。

只今ただいまもヤハリ、稱なづふることを募もつると、信しんずることを募もつると、タノムといふことを募もつると、此この三通みほほりがあるといふことぢやが、ともに御回向ごねがうといふことを忘わすれたのぢや、後生ごせい助けたまへといふは、凡夫ぼんぷの心こころから願ねがひ起たすことことでなし。稱名しょうみやうと信心しんじんと歸命きみやうとたゞ一ひと也なり。

九一 悪人あくにんになつて助けて貰ふ也

名醫めいゐに逢あうて療治りやうぢして貰もらふ時は、こちらの病やまひが重おもければ重おもい程ほど、醫者いしやの手柄てがらになる。此方このちから手傳てつだして少すこしでも善よくなりて療治りやうぢして貰もらうたら、丸々まるまる醫者いしやの手柄てがらにはならぬ。とても手ての盡つきた難病なんびやうでござりまするといふのが醫者いしやに手柄てがらをとらせるのぢや。各々おのづかも如來にらい様に手柄てがらをとらせ、丸々まるまるのお手柄てがらで御助けおたすけといふ所ところへ氣きがつかずに、我身わがみ悪者あくものに墮おちきることが出来できぬ。これが自力じりきの執心しやくしんぢや。固まより善人ぜんにん御助けおたすけとは思おもはねども、いつしかくこの心こころではの心こころが起たる云い左言さごへばとて、態わざと悪あくを作りて悪者あくものになるではない、この心根こころねの自性じしやうが悪者あくものぢやと見限みかぎりつめるほど、如來にらい様さまのお手柄てがらが顯あられるのぢ

や。自性が見ゆれば見ゆる程、深くたのまれ喜ばるゝがまことの信ぢや。

九二 念持の義

蓮如上人、別して念持の義を勧めたまふ、故に中興にてましますといふこと。是は別して珍らしきことにあらず。

他力信心といふは、たゞ一名號のいはれ、一念の信心といふは、後生助けたまへと思ふ心一ツぢやと、愚かなものに持たせて下された事也。

念といふは、心におもふこと、即信する事、持といふはたもつといふこと、「何ト心ヲモチテ」といふモツ事。「觀經」に即是持無量壽

佛名、又「阿彌陀經」に執持名號とある持の字。

又念するといふが信することなり。「二帖目」一通に「サテコノ信ズル心モ念ズル心モ、彌陀如来ノ御方便ヨリオコサシムルモノナリトオモフベシ」とのたまふ。念は憶念ニシテオモフこと。又「オモヒサダムルクラキ」とのたまふ。「オモフコ、ローツニテ」と引寄せてすゝめたまふ事。何とたのむことぞと思へば「後生助けたまへ」と仰せられたが念持の義、「ウタガヒナクオモフテ喜ブコ、ロナリ」ハ三、通、

タノムトナフルといふをさらひて、信順するのぢやといはねば、信心のならぬやうに思ふは、大きななる謬也。

九三 回向の信心とは、六字によりて、我心にお慈悲を受け持つ也

如来御回向の信心といふこと明かなり。然れども廣大なる御慈悲あなたの方より御興へといへば、いつのことぞと待つてゐるやうな聞き様ではならぬ。仍て蓮如様が念持の義を御勸め下されたといふは、信心とて六字の外にはない、シカとたのため、後生たすけたまへたため、シカとお慈悲を我心に受け持つて、差寄せて御勸め下された。

こゝを間違へぬやう、タノム心をしかと胸に起して、それが安心それが正因のやうに思ふが謬也。それ故タノム心が南無阿彌陀佛、

別して南無のすがたぢやといふが御文のこゝろなり。

九四 タノメの御言の事

蓮如上人、常にたい「タノメ」^{と仰せられ、又「シカトタノメ」}「後生助ケタマヘトオモフコ、ロ一ツ」^{とも仰せられて、「御文」}の上で聴聞すれば、吾心でたのむやうに聞える。こゝを取違へぬや

彌陀をたのむといふは、自力離れて計ひなくたのむこと、浮世のこととちがうて、彌陀の願力不思議をたのむは、はからひなくたのむこと。

そのはからひなくたのむといふは、自力疑情のある間はたのまれ

ぬ。それ故、計ひなくたのめたら、明信佛智、御與への信心ぢや。

九五 佛心凡心一體

能く聞きさへすると、佛心凡心一體になる、一體になるといふは即ち仰せに順ふことぢや。

譬へば親は吾子を随分善い者に仕立あげて、跡目を譲りたいの心然るを蕩樂してよりつかねば、親の心と子の心が別もの。所が親の念力で、その身の行末のことまでいうて聞せられ、それより心翻して親の側へ寄り添うた所が、親が別に難儀な目もさせず、食物も衣物も與へて下さる、たい大酒蕩樂やめて、人間らしき身をもつばかり、心一ツ翻すばかりで何の功勞もなきことぢや。個様に従ふ心に

なりたが、親の心と一體になりた所ぢや。

我等が後生にもとづくも之と同じこと、別に妻子捨てよとも、飲食やめよとも仰せられぬ、これが自力の修行ならばサツパリすてねばならぬ。たい光明の中に棲む身になりて、世間通途の義に順じて喜ぶばかりぢや。

九六 三信の味ひ

三信といふは、皆まことの心なれども、その味ひがちがふといはねばならぬ。至心といふは、いつはり離れたまこと。信樂といふは疑ひ離れたまこと。欲生といふは往生の一ツが何にもかへられぬ喜びこゝろ、生れんとねがふまことのこゝろ。

又信は約束のたがはぬことなり。

別願の中の別願のこと、これきけば疑ひは晴れねばならぬなり。

九七 ま こと

マコトといふは、末とほるがまことなり。いつくまでもかはらぬがまことなり。

生々世々にしみこんだ恩愛のこころさへもかはる。我等が心に貫ふた時は、たゞ彌陀一佛。法然上人は「一向ニ歸スルハ至誠心ナリ」凡夫の氣張つた熾盛心ではないこのたまふ。

九八 至り届いた心

阿彌陀如來一佛と、ふりむいた心の中には、うそいつはりはない罪も障も打出して、かざる心もつくらふ心もない。あなたのまことの至り届いたこころぢや。

母のかへれの一言に、多年の苦辛みなこもるなり。

九九 一ツ心也

阿彌陀佛に歸するこころは、彌陀をたのむこころ。これを淨土へふりむけると、淨土をねがふこころ。阿彌陀佛に向うて御助け候へといふ詞は、ふかく彌陀をたのむこころぢや云々

一〇〇 後生タスケタマへの御言

後生タスケタマへとのたまふ御言には、自力あり他力あり。他流では臨終まで業成といふことを許さぬ故に、念佛稱へる度毎に、助ケ給へ〜と思ふ。然るに御當流は平生業成、タノム一念の時、往生の業事成辨する。それはなぜなれば他力の信心ぢや。他力といふは、佛智他力の御授け御興への信心。その信心と名號と別なるものにあらず、近ごろは人別のことのやうに思ふ。信心貫ふた時名號貫ふたのぢや。

回向といふは御助けをいふなり。御興への時助かりたのぢや、米を下された時が御救ひぢや。その米たへすとも救はれたのぢや。仍て一念の時、攝取不捨の役を得たのが、助かりたのぢや。タノム者を助けるといふは、臨終のことではない、タノム一念の時助けると

いふが名號のいはれぢや。其故「御助ケアツル」とのたまふ。米貫ふたらば、最早下されと再び思はぬ。仍て他力なれば再び起る道理なし。

然れども、初一念助ケ給へと起りたが即南無の二字、これも如來の御興へ故に、その體が消えてしまひなくなるといふではない。初め起りたなりで臨終までとほる。願力にヨリカ、リたなりで、ヨリモデルではない。仍て「ナホ〜深クタノミ參ラスベシ」と仰せられて、力になる心は絶ねぬ。

然れども、後生タスケタマへとタノムと仰せらるゝ南無なり歸命なり、タノム信相といふもので、初め起りた心が、後生タスケタマへより外はないぞと、愚かなものに聞ゆるやうに、タノムコ、口を

委しく述て御聞せの御言で、一念タノムそのタノミブリの心ばねを仰らるゝ御言ゆるに、信後平生の時には、決して用ひ給はぬ御ことば。一念の處をこの御言を以て御すゝめ故に、後念には用給はぬ御言といふことを知らねばならぬ。蓮師の御意を知らねばならぬ。然るに其一念の信心はその儘相續する故に、「この一念臨終までとほる」このたまふ。その信心の力用が臨終まで貫きとほることぢや「再ビ後生助ケ給へトハ思フベカラズ」このたまふ。然るに何時思ひ出してもタスケタマへの心があるといふて、北國で諍ふた。中には現に私の胸がイツモく助ケタマへの心があるといふ人あり。こゝをよよく聞かねばならぬ。その心のあるやうに思はるゝは、アラメに紛れて居るのぢや。蓮如上人は滅度のサトリに向へば「御タスケ

アラフズルコトノアリガタサヨ」然れば滅度のサトリの方へ振向てみれば、何を申すも煩惱の中苦海の中にすむ故に、法然様も「アハレ仕オホセバヤ」このたまふ。仍て滅度のサトリを、「御助ケ」と申すこゝろある故に、その時は助かりたいの心あるにちがひなし、つねに「未來タスケル」などといふ。然れば未來へふりむけば願作佛心願往生心となりて相續する其故に我胸を願れば、首尾よく浄土へ参りたいの心はあるに違なしソレヲ後生助ケタマヘノコ、ロぢやと思ふ。尤なことなれども、後生タスケタマヘといふ御言を、蓮如上人、立てゝ御勸め下された御ことばを、ソコへ用ふると安心が紛れる。ヤハリ後生助ケ給へと思はるゝやうなれども、そこへ用る御ことばではない。

一〇一 タノム一念に覺けなき味ひ

タノムこゝろを御興へといふことが分らぬことにて、これが分らぬからタノミを嫌ひタノミを慕る。又後生助ケ給へトタノメト勸メヨと仰らるゝ。それなれば縦合たのむ心が他力にもせよ、タノメと勸められたらばハイ／＼さらばタノミませう、仰に随ひサラバたのみませふと申さねばならぬ道理。

然るにそのタノム一念は、凡夫が覺わのない一念とは合點ゆかぬタノム一念肝要とあるのに、凡夫が知ることならぬといふは、合點ゆかぬといふ。

この不審が大抵骨折て聽聞する人の胸の裏にある。よく／＼聞く

べきこと。その極速の手ばやき一念は、コ、が一念サテ二念と、凡夫が計らはれぬ、覺わなうても覺わられぬ理由がある。然れどもタノムこゝろは、後生助ケ給へトタノムより外はないと、明に聞いて信をとりたる上は、口に顯はして「後生御助ケ候へトタノミ申シテ候」と、憚りなく申上ることぢや。手早き時刻は覺わなければども、明にタノマレた味ひが既に起りてある故に、胸に割符合せたうに、いつも／＼御ことばが聞ける。

一〇二 他力の發起

一念……凡夫の記得のならぬこと。

一心……信心、三信合した一心の凡夫のきばり

信心定まる………定まる

おもひ定むる………定むる

一念おこるとき………おこる

信心をおこせば………おこす

同

同

「定まる」「おこる」は、他力なることをあらはし給ふ。「定む」「おこす」といふは、他力よりおこさせ、おもひさだめさせて下さる。他力くといふて、なげやりておかぬやうに、確と思ひ定めよとのたまふ。そのおもひ定めらるゝは。その思ひ定るたねがなければ定めれぬ。その定めらるゝたねが、御興への南無阿彌陀佛なり。

一〇三 雑行は自ら捨たるなり

雑行すて、彌陀をたのめよと仰せらるゝ。すてにかゝるではない。妙薬とまゝしより、自細工の丸薬は、そのまゝすたるなり。秤の低昂の同時なるが如し。

一〇四 後生に實意のなき事

各々ごうも後生大事に實意がない、この後生大事には一杯實意がなければ聞ねぬ(この實意が往生)故に「御文」には「眞實ニ佛法ニソノ志ハアサクシテ」と仰せられた。取合うて話をすれば、随分と調子は合せるが、ごうも實意がない、その實意といふはどんなものぢや。先づ親が繼子に物やる時は、人の見て居る所でやる、これ繼子には物も遣るまいと思はれようかと思つてワザど人前で遣る。又我

眞實の子に物くれる時は、人の見ぬ所で遣る、我子ぢやと思つてヒ
ドク可愛がると思はれやうかと案じて、人の眼をかくしてする、こ
れ實意と不眞實とは是程の違目ぢや。

各が参り下向も一日に二返も寺へ來るとハヤ善知識や手次へ恩に
かけたいやうなこゝろ、人目しのんでも聞せて貰ひたい、人の目隠
れても御影前に跪づいて御稱名唱へたいと、ホンニ如來様と差向い
になつて、實意はこぶことが出來まいがの、それで何で佛法の眞實
が聞わやうぞ云云

一〇五 大事に思ふたご、なりたごは異ふ

我身の後生にナゼ實意がかけられぬ、たゞ後生大事と思つたご、

後生が大事になりたごは異ふ。此間の地震(天保二年十月九日)の時、
誰れ一人静としてをるものはない、これ平生に地震といふは氣味悪
いと思はぬものはない、その思ふたごハヤ恐ろしくなりたごは異ふ
これで能く思はれよ。

一〇六 人並と思ふ可らず

後生ば人並ではならぬと仰せらるゝ。此間の地震の時、誰れ一人
お前の家ではお遁げなされますか、それならば私宅でも遁げませ
うというて、聞合せて來たものはなかつた。後も後もゆりこまれて
も、手前の家内だけはと、石の上に居るものもあり、野原までこし
てゆくものもあつた。又隣の土藏は壊れた、向ひの土藏も壊れたが

オラが土藏は壞れんでハテサテ残念よというて居るものはなかつた
少しなりとも人よりは少くしたい、災難遁れたやの思ひであつた。
そんなれば人並に思うては居られぬ。

各は私等も喜べんけれども、イヤハヤ誰れしもそんなに喜んで居
らぬものぢや、おれも大抵人の口元にも氣をつけて居るが、誰もそ
の様に稱へ續けて唇動しておらぬものぢや。いつくの裏にもさてさ
てないもんぢやなごいふ。その心は我が喜べぬのに尤をつけたいの
ぢや。ナント今に焦熱大焦熱の火の中へ裸體で落ちて、わが體が悪
業力で蠟燭のとぼるやうに燃る時おれも人並ぢやというて辛抱が出
來るか、人見合せて安堵して居らるか、どうしてこの苦を遁れや
う、五劫永劫の御本願を水の泡にしてこの火の中へ又落ちたかと思

ふ時の悔しさは、どうであらう、サアどうぢや、こゝを「大經」に
は「人の後にあることを得ることなかれ」と仰せられた。

一〇七 親が子に禮言ひて手習ひさす如し

善知識は、この信心を取りて恩にかけて來るものあるは、了簡異
ひ、わが一分の徳ぢや、去年信心とりてくれたら恩にも御受けある
べしと仰せられた。

此間さる所で幼ない子を寺入りさせて手習ひさせた。兎角手習い
やがる故に、毎日賃をもらせてすかしてやると、モウそれが當前の
やうに思うて、親に手習してやるやうに思うて居る、親はヤハリ恩
にうけて禮いふて手習さす、餘り毎日ねだられて、その親もチト呵

つて、「さうくは賃もない」といふたら、その子「ヨシくそんならモウ手習してやりはせぬぞ」といふた。自分一生涯目くらになりて、人の手紙も讀まれぬ時は、大泣きに泣いて熱い涙をこぼすであらう。

さきの見ゆる御慈悲の善知識は、恩にもうけて信とらせたいと仰らるゝ。

一〇八 後生助け給へたのためば、外の心は起らぬ

程に心配するなよこの仰せ也

一方よりは、後生助け給へど、心に思はねばならぬ、口にもいはねば、領解にならぬといふ、これ謬り也。

又一方より、後生助け給へといふ御言が解らぬ故、自力臭いやうに思ふ。是も謬り也。

よく聞えず、疑も晴れずに、後生助け給へと思ふたら、鎮西の心存助給と同じこと故に、自力にちがひない、こゝが當流は聞其名號と六字の謂れが聞けると、自力をすてゝたのめる大悲、そのたのめた心を現はして、後生助け給へたのんだのぢやとの仰せ、外のころは起らぬ程に、心配すなよとのたまふ。

三世の諸佛にすてられた身の上の後生の一ツを助けるぞの勅命のきこへた儘のヤレ嬉しやが後生助け給へでなうてなんとせう。

一〇九 押付氣味

御助けにまちがひないと思ふに、まだく紛れがある。「信ズレバ必ず御助けには間違ない」と、ワケの解りた分齊で、まだ信を得ずに、間違ないと押付けて居る人が多い。

胸に押付氣味のあるのは、ホンマ物でない、お慈悲が聞えて、疑なくなりて、御助けに間違ないと思ひ定められたら、一念なり一心なり。そのオモヒ定ムルと仰せらるゝと、定マルと仰らるゝと、定ムルと仰らるゝと、變りはない。

定まツたから、心の底に思ひ定めらるゝなり。その思ひ定めらるゝには、定めらるゝ太子がなくては思ひ定められぬ。その思ひ定めらるゝ太子が、御興への南無阿彌陀佛。

一〇 凡夫で定められぬ一念

たのむ一念肝要と仰せらるゝ、然るにその一念が、凡夫からいつが一念でありたと定められぬ、仍て皆人が不審に思ふ。こゝを能く聞かれよ、一念といふが肝要といふは、この一念がなければ往生かなはぬ、故に、肝要にちがひない。

然るに凡夫の覺わられぬといふは、聞其名號信心歡喜乃至一念と説き給ふ、名號のいはれの聞けた時起る、聞けた同時間に、髪といはれぬ時起る一念。

其故に御文には、南無阿彌陀佛のいはれを一通ごとに仰らるゝ、南無といふは雜行すて彌陀をたのむ心、阿彌陀佛といふは攝取不

捨必ず助けるといふ御謂れとのたまふ。このいはれの聞けた時起る一念、これが善知識のことはの下といふこと、善知識のことはが南無阿彌陀佛のいはれ、二尊の勅命、その聞けた時に起る一念。

一一一 善知識のことはの下のこと

ことばの下といふことがわかれば、こゝが一念ぢや二念ぢやと、凡夫のはからはれぬことが合點ゆく。

先われ等がこの持前の煩惱の上をいうてまかす、食と眠のおこるも、向うのことばの下で起る。無理なことぢや、我身のことぢやと聞けた時、胸か燃わ立つ程腹が立つ。そのことはの分りた同時に腹がたつが、その瞬が何念つゝいたといふことは、わが持前の煩惱

できへわからぬ、まして況やき得る時に與へて下さる、佛の廻向の一念、佛のなしわざ、その手速きことは極速とある、凡夫の心でこゝが一念こゝが二念目など、計らふ道理はない。其故凡夫がうろたへぬやうに、シカと善知識のことはの下とのたまふ。

一一二 一念と後念

一念が直に歡喜なれば、これ又初めて起る一念の喜びは、凡夫が覺わす起る。無始己來の疑のなくなりた一念は、たゞ歡喜といふより外はない。

ワケの解りたのと、疑のはれたのと、紛れのないが歡喜ぢや。一念起つた時、歡喜も起つて居るのぢやによて、喜ばうと思ふて喜

べたのぢやない。まこねた時に、我を忘れて、ヤレ嬉しやと起つたのぢや。

それより我等があらくしい心に浮んで、嬉しやくと思はるゝに、一念の場とは思はるゝな。それは後念の相續ぢや。云々

一三三 甘露の念佛

「源深クシテ流レ長シ」もとの一念が歡喜ぢやによりて、稱ふる念佛のありたけが、みな歡喜の念佛甘露の念佛とも仰せられて、みな嬉しやくの念佛、往生不定の胸から稱ふれば、又雖念佛失甘露味このたまふ。疑なき胸より稱ふれば、フト口クセに稱へても嬉しやくの念佛故に、他力催促の太行ぢやと仰せらるゝ。

一二四 病める青年に遣せる法語

十九歳の男子やまひれもきものにはじめてまかせたる番附なり。自らも病にてゆくこゝ能はず、これを興ふる也。

南無阿彌陀佛といふは、たいわれにまかせよ、かならずたすけるぞと、よびかけて下さるゝ御よびこゑなり。今みにまこねたるは佛の御ことばが、はやわが身にといきたるなり。私一人を助け下さるゝための阿彌陀如來の御慈悲ぞまこねたる計りなり。さらにまぢがひなく、あぶなげなしに、われを御助け下さるゝぞと、一筋のこゝろとなりたるを、一心とも、安心とも、たのむともいふなり。佛の御よびこゑが、ちからになりて、うたがふおもひのなきばかり

なり。そのうへには、一こゑなりとも、南無阿彌陀佛ともふすばかりなり。

一一五 妙薬の力

名醫の薬のたゞ一方で、病の根のきれる如く、親の生肝血しほを搾りこんで下された妙薬ぢやによつて、たゞ一名號のいはれで、疑もはれ、喜びも起り、足手も動くやうになる也。

一一六 急がば廻れ

「急がば廻れ」といふことがある、急ぐときに捷徑を行くとまどつく。丈夫な本街道を行く方がまちがひなう、早く思ふ所へ至ると

いふこと。

各々がたゞたのむ信するの道理々屈のみ捉ねたがる故に、まことにたのまれぬのぢや。

一一七 三信即大悲心

三信の御マコトをたまはるが信心、己がかしこくて信心おこすではない、あなたの大悲の御心が、わが浄土まゐりのたね。あなたの大悲心がたねならば、ナニ疑ふべき筈はない。至心信樂が直に満足大悲心なり。

一一八 自力のかなはざること

「和燈」二(左)に無始已來貪瞋具足の身にて、無明煩惱を斷せんと
することは、須彌を針にて壞き、大海を芥子の杓子にて汲つくすと
も、なほ叶はぬことぢやと仰せられて、その次に、「そのゆるは、念
々歩々におもひとおもふことは、三途八難の業、ねてもさめても案
じと案ずることは、六趣四生の縛也」文と。

一一九 只今とおもはれぬこと

みな人ごとに、此御法きくほどのもの、後生をじよさいに思ふ心
はない。わしも此分ではすまぬことぢやが、その中にはよくなりて
胸もスツカリとなりて、喜びたいと思ふ人が多い。

今日この儘ながら、此心の對手にならずに、あなたの大悲心一ツ

をきよつけたいと、フリムク人は、甚だ以て少ない。

一二〇 臨終の一念

「和燈」四七右「問曰、臨終ノ一念ハ百年ノ業ニ勝レタリト申ス」云々
「元祖ノ御答ニ三心具足ノ念佛ハ、平生臨終同シコトナリ」云々。こ
の問ひは禪勝房の問ひといへり。或文には隆寛律師の問ひといへり
とある。

これは「居士物故爲婦鼻蟲經」といふ一卷の經あり(「經律異相」三
十七丁「塵鈔」二十三丁所引)その中に五戒の優婆塞、臨終の一念
によりて、その妻の鼻中の蟲となりた因縁あり、平生に五戒を持ち
た人なれども、臨終に其妻がいろく恩愛のことを言ひ並べて悲む

その聲をきき、臨終にさても不便やの一念おこるなり引取つた、その一念によりて、平生の五戒の功德なれば、勝れたる人間に生を受くべきに、轉じ變りてその妻の鼻中の虫に生れた。その妻が夫の没後に、鼻中がはれて物が出来た。アライやらしいといひて捨んとする折節、夫の存生の時歸依した大徳の僧が來りて、大いに悲まれ汝は知るまいが、その虫は其方の夫ぢやといはれて、女房が打驚いたといふことあり。云云

臨終には心がたいその一ツに止る。それ故に、他宗に於いては臨終正念を祈る。祖師聖人二十年の間、日枝山に於ての御苦勞、それらのことは御存知なきことがあらうか。云云

一一一 臨終悔るべからず

如樹先傾倒必隨三曲也、若刀風一至百苦淺身、若習先不在懷念何可辨と、安樂集上八右の文、この樹の倒るゝ喩は、善導禮讚前序にも此通りなり、又若習ひ先より在すんばのことば、法然上人の「和燈」の中にも用ひ給ふ所なれば、必々臨終といふことは悔るべきことにあらず、まことに可恐ことなり。

念佛の行者の終のめでたきことは、御開山様も御喜びなされてある。然るに又親戀においては、臨終の善悪は沙汰せぬとのたまふ思召は、まことに有難きことにて、邪見にならぬやう、能く心得ねばならぬ也。臨終は何でもなきもの、どうでも大事ないを仰せらるゝ

思召ではない。又臨終のおそるべきことを御存知なうて仰せらるゝやうなことではゆめくはない。臨終の大切なることは、厭まで御存知あらせらるゝ。その臨終が大切ぢやから、平生に業成せよとのたまひ、平生今日をまことの臨終と思つて聽聞せねばならぬ。

今日愚か者が、後生が大事になると、臨終を取つめてみれば、胸の裏が闇黒になりますといふてなげくは、これも自然の道理で、死ぬるといふは誠に怖るべきこと、平生にウカ／＼聽聞して、死場であらたへて死ぬるものが、數限なくあらうけれども、凡夫の目には見えず、もはや病にとぢられて、物もいはれず命了ることぢや。仍て御當流では其臨終を今日として、善知識の言の下に歸命の一念起るがマコトの臨終、死場にされるが身の命、無始己來のこゝろの

命のされ場が、マコトの臨終とのたまふ。まことに甚深のみのりなり、流轉のキヅナのされどころが、ハヤ臨終とのたまふみのり也云

一三三 平生業成

善導四禮の御譬に「如樹先傾倒必隨曲、故必有事碍、不及向西方、但作向西想とありて、西の方へ曲りた樹を伐れば、西へ傾ける、東の方へ向つて曲つた樹を伐れば東へ傾ける。ごちらから切りても平生に向つた方へこける如く、平生業成と平生の時に、西へ／＼と向うて居れば、臨終の夕には西の方へ往生する程に、渡世家業に隔てられて、からだか西へ向はれずば、心ばかり如來へ向うて月日送れと仰せらるゝ。

朝から晩まで御内佛に向うては居られまいが、行住坐臥にも我心が佛に向うた味ひで相續のなるのが、憶念の心つねなるすがたぢや平生に西へ向つてさへ居れば、何時無常の斧で切り込まれても大事ない。云々

一三三 自の宿善の有無を疑ふべからず

聖覺法師の「唯信鈔」に、ある人の疑をあげて「臨終ノ十念デタスカルト云フ如キハ、宿善アツキ人、今日ノワレ〜ハ、宿善ウスキユエニ、往生イカトイフモノアリ、コレ大ナル誤ナリ、一生涯悪ヲナシテ臨終ニ十念スル人サヘモ、宿善トイフナラバ、一生涯稱念スルワレ〜何デ宿善アサキ身トイハンヤ、小智ハ菩提ノサマタ

ゲトイヘルハコノタグヒナリ」取意と御阿なされた、誰でも大事になりて取つめて見ると、案じられるは此宿善の有無ぢや。

然るにお互に最早無宿善ではない、斯く求めもせぬ身が遁げられぬやう、聞かねばならぬやう、御法に離れぬやうにして下さつた。求めて聞きたがるものよりも、あつき宿善ぢやないか、されば宿善があるまいかの案事はいらぬ、この信を取り疑はらすのが宿善開發ぢやと仰せられる。

一三四 疑ふは己が罪也

疑ふといふは、わが疑ふので、わが過ゆるに、わが手では晴れられぬ。わが過でわが身を縛つた罪人が、わが手で解かれう道理なし

それで知ら、そうとて、祖師聖人「疑網」と仰せられた。たい善知識の御化導の手を以て、引出して下さるゝ。

一一五 雲 月

疑は凡夫の心に附いてあるなり。あなたの御手元にはない。それをば私は参りたいと思へども、あなたの御手元がどうちややらと、あなたの方を聞く思ふ。

譬へば雲は此大地より湧き出で、山より立のぼりて高さ五丁六丁僅か一里より濃き雲はないものなり。月は四萬由旬の高さ、一由旬を八里ほどにつもりても、四八三百二十萬里なければならぬ。それをば凡夫の眼から見れば、雲が高く見えて、雲と月とは同じ高さで

月が雲に隠れ給ふ様に見わる。これが大まちがひ。

今も如來さまは晴天白日、いつも明らかに助けうぞくと呼びづめに呼んでおはします。己が心から疑の雲を出して、わが心をくらくして、それをばあなたがどうちややらと疑ふのちや。

善知識の御化導の風の一吹きで、吹きはらうてみたれば、わがあやまりと思ひ知らるゝことちや。

一一六 我心を先きに立てる

聴聞が大切ちやといふは、雜行すてゝと仰らるゝと、サラバとすてにかゝる。たのむものを助けると仰せらるゝ、サラバとたのみにかゝる。たのむ心おこせよと仰せらるゝ、おこしにかゝる。思ひさ

だむる位くらゐを聞きけといふとあれば、推おし附つけて定まめにかゝる。

かやうにさく故ゆゑに聞きき間ま違ちがふ。聞きき間ま違ちがひと思おもはずにまちがふのも、何なにをいふも、生しやう々く世せ々の自じ力りきの執しよ心しんのなしわざ、善ぜん知ち識しきの御おことばをあとにして、わが心こころをさきにたてるからぢや。折せつ角かくよき提てい灯とうもちながら、提てい灯とうをあとにして、わが足あしを前まへに踏ふみ出だすやうなきやうをする。それゆるにいつも足あしもとが暗くらい。

一一七 心の底の味あじひが最もつ微い細さいなり

たのむものを助たすけると仰あやせらるゝ六じ字じの謂いはれをきゝて、ズツト左さ様さまならば私わたくしがたのみますサカイ、御お助たすけ下くださりませのこゝろではないそのたのむといふは、不ふ思し議ぎの佛ぶつ智ちを信しんずることゆるに、かゝるも

のを御お助たすけぞと深ふかくたのむ思おもひぢや。

各おの々はこれがふかくたのむのぢやの、これがヒシとすがるのぢやと、わけきくことはかりが微こ細こな道どう理りと思おもへども、それよりも内ない心しんの味あじひ、ごうしたならばたのまるゝ、そのたのむ味あじひ、心こころの中なかの疑うたがひ晴はれた味あじひはごうぢやといふこゝろあぢ、それをいふのが一いっ番ぱんにこまかな道どう理りぢや。

一一八 盲めくら人の杖つゑを失うしなふ如ごとし

めいゝが、後ご生しやう大だい事じにならぬさきは、わけわかりて居ゐたのが、今いま打う驚たさいて見みれば、初はじめて盲めくら人の杖つゑを失うしなうたやうになるなり。

一二九 麁垢先除くが如し

如^レ洗^レ衣^レ麁^レ垢^レ先^レ除^レ、地^レ獄^レも極^レ樂^レもないといふやうなあら／＼しい垢は早速に脱^レる。次^ニにはナンボ御^レ慈^レ悲^レでも、こんなものが生^レれられやうか、こんなもの御^レ助^レけがどうぢややらといふ疑^レひが起^レる。その垢がおちると、その次^ニには、信^レを得^レたらかうではあるまい、信^レを得^レぬから、喜^レべぬ／＼と思^レふ。遂^ニに其^レ垢^レまで脱^レると、たゞやうもなく嬉^レしうなる。御^レ座^レできく間^ニは、胸^ニもスツキリしたやうぢや、吾^レ家^レへ歸^レると覺^レるといふ間^ニも永^レいこと。

然^ルにその細^レかい垢^レは、弱^レい力^レではなか／＼脱^レちぬなり。

一三〇 歸する心の疑ひなきを信心といふ

「彌^レ陀^レに歸^レするころの疑^レなきを、眞^レ實^レ信^レ心^レとはまうすなり」このたまふ。歸^レするといふにも紛^レれがある。歸^レする心^レのその心^レ底^ニに、疑^レ心のなくなりたるは御^レ與^レへの信^レ心^レ。

この無^レ疑^レのたまふが肝^ニ要^ニなことで、此^レ比^ニは此^レタノムといふことを彼^レ是^レむつかしう申^レすことで疑^レひなくといひてもマダ足^レらぬ、タノムといつてもマダ足^レらぬ。後^レ生^レ助^レけ給^レへとたのみましたと、口^ニにもいひ、心^ニにもシカとたのまねばならぬといふものが、田^レ舎^レ々^レ々^レにあるといふこと、そこを偏^レらぬやう。

成^レ程^レ只^レ疑^レはぬといふばかりでは紛^レれる。後^レ生^レの大事^ニといふことが

胸になきもの故に、疑ひも出ず、只疑はずに居るものもある。悪人も助けるその仰せ、斯るものを御助けと存じ、ツイに疑ふたことはござりませぬといふ人あり。それはマダく疑ひの出ぬのちや。愈々大事が懸りて見れば、晴れ難いものは疑ひなり。疑ひなくと仰せらるゝは、我心をかき廻して、疑ひを晴しにかゝるやうなことではない云云

一三二 他力でなければ晴れぬ疑ひあり

佛智の不思議を疑ふ疑ひは、つねく眼の前のことを疑ふ疑ひとはちがふ。日の暮方に向うを見れば、鬼の頭のやうに見ゆる木の株が、鬼の首かと疑ふ。ヤハリ木の株であつたとき、ワケが判ればその

疑はなくなる。

今「稱名憶念スレドモ、無明ナホアリテ志願ヲミタサルモノ」と曇巖大師の仰せられたは、ワケが判りてあれども、心底から夜のあけたやうに、志願満足安堵決定心の喜びの起らぬは、たゞ一通りの疑ではない。生々世々の迷ひの根となりた元品の無明といふ無明の間が破れかねる。

其故に吾自力では離れられぬ。佛智の不思議を信する信心は、凡夫自力の信にあらず、佛力回向、如來の大悲が到り届いて下さるゝ故に、往生ほどの大事に露塵ばかりも疑ふ思ひなく、願力の不思議を以て必ず助けましますことの嬉しやと、疑ひなくすがりまゐらす。そこを「歸スルコ、ロノウタガヒナキヲ眞實信心トハ申スナリ」

と仰せらるゝ。

一三三 無疑の一心

たのむワケも信ずるワケも解る。たのむこともわかる。口にもいはるゝやうになるが、彌々大事になると、心底から疑なくなるといふことが甚だ難い。

ソレハ大事になりて見ねば知れぬ。其故に今歸するころの疑なきと仰せらる。無疑といふは、疑なき實心を御與へに預りて、今まで有りた疑ひのなくなりたこと。吾心で疑ひがなくなりたではない。疑蓋無雜の心を御與へに預りて、疑ひなくなつたのぢや。これを無疑の一心といふ云々

一三四 疑ひのなくなりた心ばぬ

「信ハ疑ノコ、ロノナキナリ」といふ。この疑といふを、世間でアノ人のいふことはホントかウソか、ウソではないと思ふたら、疑ひのないのぢやと心得て居る。それは人間かりそめの疑ぢや。

疑はぬが信ぢやとあれば、これより外に信はない。如來の御ことばにウソはないと思つてゐる。今疑といふは。向うの御ことばがウソかマコトかと思ふやうなことではない。今此に疑ひといふは、無始已來迷ひ迷ふた迷の根本の無明の闇が疑ぢや。其故に佛の御言にウソはないと思つても、心底に闇き所がありて、何がドウぢややら心が昏い。その無明の闇が破れてアラ嬉しやとなりたが、疑ひのなく

なりた心ばへ。山も河もかわらねども、闇のはれたは大ちがいぢや

一三四 衆生が佛を捨てる也

めいゝは是程に求めても、信心が得られぬことならば、せうこ
とはない、地獄へ墮ちても仕やうはないなどと、大膽なこというて
ゐるものがある。

助け給ふ如來はそうではない、是非ともに聞きつけさせたい、是
非とも迎へとりたい、地獄へ落してはならぬ。その御心を知らせた
いとて、我一人子の如くぢやと仰せらるゝ。それならばこそ眞實の
親様。我等は親とも知らねども、あなたから我眞實の子ぢやぞと仰
せらるゝ。

それなればよく思はれよ、悪い子でさへすてかねる親の慈悲、親
を慕い、親にすがる子を、大悲の親が棄てられうか、それゆゑに、
我等が地獄へ墮るのは、衆生が佛をすてるのぢやとのたまふ。

一三五 大悲か届いて疑晴れる也

一、善知識の御傳へによつて、阿彌陀如來の御喚聲が聞ゆる。そ
の御喚聲といふが即南無阿彌陀佛。然るにこの御一言の御聲に五劫
永劫の大悲の御こゝろがこもるといふことが、合點がゆきかねる、
それを譬へていはし、母のかへれの一言に廿年の骨折がこもる云々

一、旅から還つてくる我子が、大津まで来た。親は使を遣して、早う歸れ〜といふ。五日も十日も大津に遊んで居る。又自性の地金が出て来て、雲助仲間に引返されたといふやうなことがあつたらその親の心はどうであらう、腸ももみされるやうであらう云々
 それ故に、信心とりて恩にさせるならば、恩にも受ける、禮もいふ程にと御勧め下さるゝ。

一、孰れも如來の大悲が届かねば、まことに疑ひははれられぬ、その大悲の届くのが、よく聞いてきこわる一念云々何ぼ一大事とふりむいてきゝても、早いもあれば遅いもあるほどに。

一、如來の大悲がとゞけば、命一刹那にせまつたものには、たい一遍でとゞく。又きいてもとゞきかぬるならば、どこまでも本願のものを求めまきけ、本願の起りをまきけとのたまふ。

一、如來の大悲がとゞけば、皆信が得らるゝならば、もとより平等の大悲なれば、みな〜届きそうなものぢや、届くあり、届かぬあり。こゝを「大論」に衆生のかたにさはりがあるとのたまふ。佛の神通でもみな〜濟度がならぬが、衆生の方に重々のさはりありとのたまふ。第一に三惡道の身、次に大少大老大病、その次には業障云々

一、旅から還つてくる我子が、大津まで来た。親は使を遣して、早う歸れ〜といふ。五日も十日も大津に遊んで居る。又自性の地金が出て来て、雲助仲間に引返されたといふやうなことがあつたらその親の心はごうであらう、腸ももみされるやうであらう云々
 それ故に、信心とりて恩にさせるならば、恩にも受ける、禮もいふ程にと御勧め下さるゝ。

一、孰れも如來の大悲が届かねば、まことに疑ひははれられぬ、その大悲の届くのが、よく聞いてきこわる一念云々何ば一大事とふりむいてきくても、早いもあれば遅いもあるほごに。

一、如來の大悲がとくれば、命一刹那にせまつたものには、たい一遍でとく。又きいてもとくさかぬるならば、どこまでも本願のものを求めまきけ、本願の起りをまきけとのたまふ。

一、如來の大悲がといけば、皆信が得らるゝならば、もとより平等の大悲なれば、みなく〜届きそうなものちや、届くあり、届かぬあり。こゝを「大論」に衆生のかたにさはりがあるとのたまふ。佛の神通でもみなく〜濟度がならぬが、衆生の方に重々のさはりありとのたまふ。第一に三惡道の身、次に大少大老大病、その次には業障云々

一、如來の大悲のわけがきこねると疑ひはれらるゝ、世間の上で
さい、向うのころが知れねば、疑は晴れられぬ、向ふの心底がわ
かれば疑はなくなる、大悲の御ころがわかれば、疑ふべきやうも
なくなる。それゆゑに一念の疑心を生ぜざるなりと云ふ

○
一、如來の大悲といふは、佛の御心のありだけ、いかゞして今日
愚かな凡夫が、佛のころがわからうぞといふに、ころがこちらよ
り知りかゝつたら補處の菩薩でも佛のころはしれぬ。又彼方から
知らそうと思召せば、愚かな人間どころではない、「婆娑論」に罔猴
知佛心といふことがありて、山の猿さへも佛の心を知つた、これ佛
から知らせて下されたのぢや、云々

御たすけ下さるゝばかりが、佛の心と疑ひはれたが、佛心のありた
けを知つたのぢや。

○
一、他力の信心といふは、いづれにも如來の大悲が届かねば疑は
晴れぬ。その大悲のとくといふが、きこゆることぢや。それゆゑ
に、大悲のあなたは、といけるに骨を折らせらるゝ、それが種々善
巧の御方便なり。

一三六 疑は如何にして晴るゝか

流轉輪廻のきはなきは、疑のなしわざとあるこの疑、時にこの疑
は、世間の眼の前のことを疑ひ、親子兄弟の中で猶豫するなどは

大異ひ、これは無明の闇ちやと仰らるゝ、其故に如來の御助も疑はず、罪の深さも御洩しはないと知りつゝも、何となう心の底に小闇い所がありて、佛教とは何ぞ隔てがある様で、愈々一大事、永劫にも取返しのならぬ後生、今死んでもよいかと言はるゝと、決定心の場にいたらぬ。これ一言でいへば、如來の信心を貫はれぬからちや。

モト如來の御方で、疑蓋無雜の心と言うて、疑の塵程も雜らぬ心を御成就なされてある、それを與へ下さるゝのちや、わが力で疑晴るゝではない、疑なき如來の御誠が届せられて、疑晴るゝのちや然れば疑晴れずば晴るゝまでき、稱へられずば稱へられるまでき、聞けば疑晴るゝ謂れが、南無阿彌陀佛の中にあると仰せらるゝ

一三七 疑に種々あること

それなれば各の疑、その體は無明の闇、其を委しく吟味して、種々の疑ふ姿を言はし。

- 一、或は後生が大事になられぬ、どうぞ後生を大事と心懸けたいが如何してもシミと大事になられぬは、俺は無宿善ではないか知らぬと云ひて、疑うて居るものもあり。
- 二、又信心を得るは、機法二種深信、我身は悪き徒者と見限りつめよと、仰せらるゝ。ホンニ地獄一定と思はれ、只今死ぬると思はれ、未來が恐ろしいと思はれたら、早速お慈悲が頂かるゝであらうが、そうはならぬと言うて居るもあり。

三、次には何でも願力で助かると仰らるゝからは、佛智の御計ひとは打任ては見るけれども、願力はあなたの方にある様に思はれ、我心は煩惱ばかり、死んで惡趣に沈みさうな心地せられては、胸を探りたり、稱うる念佛にとらまつたりしてをるといふものあり。

三、又たのむばかりで御助け、たのむとは打任ることじやと仰せらるゝ、この心になりたが真にたのんだというものやら、我心が知れぬと言うてゐるものもあり。もし今の我が思惑がたのんだといふものやらといふ疑あり。

四、又信心の上からは、喜ばるゝと仰せらるゝが、朝から晩まで嬉しいといふことはない。御座で御縁に遭ふ時、或は物に感じた時は嬉しけれども、始終に嬉しやゝの思ひが起らぬと言うて居るも

あり。

五、又信の上には御報謝が面白く勤まり、掟も守らるゝといふが私は御報謝もつらし、たしなみも疎かぢやによつて、まだ信心貫うたではあるまいかといふ疑ひ。この二ツはみな信後の相を以て初一念を疑ふのぢや、是等の類が先みな同行の煩ふ姿ぢや。その實はいろく無量なれども、先これだけの疑を辨別しておく程に、心を止めて聴聞せられよ。

一三八 後生大事と思はれぬ疑に就いて

先第一の機類、後生が大事でないといふは、これは一向入口なれども、これが先根本ぢや。後生大事の思ひ起るは、宿善あるしるし

ちや、これ一口にいへば獨生獨死のことわりが知れず、只今死ぬる身と思はれぬからちや

又後生大事といふ心がけに別體はない。眞實このたび取損じともないと實意を盡すが大事の思ひちや。

二三九 後生一大事に型のきまりあり

蓮如上人、常々にこの後生の一大事を深切に仰せられて、「御文」「改悔文」いふに及はず、「御一代記」にもたびく「後生一大事と存する人には、御同心あるべき由仰せられ候」。又御往生の後、夢にまで御見なされて、「後生は一大事ちや」と御告げなされ乃至「かしまり候にてはなく候」。たい一大事ぞとまで取意に御告げなされた

それならば何程大事にすることぞ、どのやうになりた心中が大事ぢやと申すに、この後生一大事のことろには、これといふ限りはな、外のことはみなその型がきまりてあれども、この心がけにはこれぞといふ型はない。

一四〇 道心體なし

播摩の道寂僧都（「新修往生傳」ニハス、ソノ國失念ス。）といふ人、初瀬の觀音様へ道心を祈られた。道心とは菩提心のこと、「私は道心が起りませぬ、どうぞ道心を起さしめて下されたいと、眞實に祈られたれば、その時御告に、道心體なし、その心即道心」とおつげなされた（「長明ノ發心集」）これと同じ味で、ホンニ私は後生の大事を知らぬ、

何ぞぞ後生を一大事にしたいと思ふ實意あらば、それが後生の大事になりたのぢや。維摩居士が法を求る心を（不思議品）説給へると同じことで、これぞといひておさへられぬものが後生の大事。

去り乍らこの後生一大事の思ひだにあれば、法は聞ゆる、この心なきものは聞ゆる、蓮如上人の無道心くくと（御文）叱りたまうも、この心なきことぢや。

一四一 一大事といふこと

後生の大事といふは、大事とは大きなこと、その位の大きいなること、先世間で大きなことは火事ぢや、仍て火の元は大事くといふ。これ盗賊が這入りても家まではとらぬ、火事にあへば、何もか

も人の家諸道具まで焼き亡す故大事といふ。去り乍ら命に比ぶればまだく小さい。然れば此世では死ぬほど大きなことではない、死ぬるといふ一ツは、一たび息絶わぬれば、萬劫にも取返しはならぬ、家の焼けたも作りなほさるゝけれども、我命のきれたは取返されぬぞれなれば世界中の大きなことは死ぬことぢや。

然るに此度の後生は其生死が百たび千たびの死ではない、これに過ぎたる大きなことがあらぬ故、一大事ぢやと仰せあらせらるゝ

一四二 水上の雪の如し

同じ降る雪が、石の上や橋の上に降る雪は積る也。水の上に降る雪は積らぬ。

我れくも妄念散亂の降る雪は昔に變らぬ身なれども、信心の上におこる妄念は水の上の雪の如く、積りても未來の種とはならぬと仰せらる也。

一四三 聽聞の心に入らぬ疑に就いて

次にどうも聽聞が心に入らぬといふ尋ね、これも上と同じこと。喉の渴かぬに水は飲まれぬ。又渴した時は、水の代りになるものはない。その喉の渴かぬは鹽をたべぬからぢや。たべぬではない。たべ乍ら知らずに居る。善導も「愚夫、長苦をのむ」と仰せられた。
(過去に於て阿羅漢脱法の時女人制を犯して法を聞かざりて喉の渴きたる牛の殺さるゝを忘るること)
又云、心の振り向きやうが違うからぢや。我胸ばかりさがすあや

まり云

一四四 地獄一定と思はれぬ疑に就いて

次に地獄一定とドウモ思ひつまりませぬ。これが地獄一定と思はれたら得られう、地獄が恐ろしうござりませぬ、恐しうなりたら得られうと、我心をせめてもせまらぬといふもの。これ又悪しきことではない、随分よきことなれども、それが機の深信ではない。我が機を見限りつめるといふは、詮方なき我機を思ひ知らせて下さるゝこと。身が熱くなり、眼に火でも見わて地獄一定と思ふことではない。地獄へ行く身ぢやないか。落ちやうと思つても、落ちま
いと思つても、一刹那々にハヤ地獄の火の近づいて居る身を持ち

乍ら、地獄と思はれぬは何故ぞ、これが悪業力、然れば因果の道は
髪の一筋も間違はぬものなれば、地獄一定思はれぬ我この心が地
獄へ落るしるしぢや。

恐ろしい地獄を恐ろしいと思はぬほど恐ろしい心はない。この心こ
の儘で地獄一定ぢや程に、吾胸探して居るではない、たゞ本願の御
手強きお慈悲にすぎるばかりぢや云々

一四五 願力と心とが離れ〜になるといふ疑に就て

さて第三、願力に絶るその願力があなたにあり、法體のやうに思
はるゝといふも、まだスツカリと任せられぬ。願力はあなたの方に
あるのではない、わが信心が直に願力回向の信心、故に善導は白道

を或は信心の白道とも仰せられ、或は願力の道とも仰らるゝ。願力
をあなたにながめて、こちらの胸には何もなき様に思はるゝことは
いつくまでも誤り也。

一四六 たのんでも助かられまいといふ疑に就て

さて第四に、たのむといふは、まかせることぢやと仰らるゝ故に
御まかせ申しては見れば、危なげがこれぬといふ疑、これが
第一つまらぬ疑なれども、これ甚だ要論也。此がスツカリと手が離
れねば、眞の決定心にはならぬ故に、極々さばかりた落着を申さ
うならば全體は地獄へ落ちんつもりで聞いてをる心中故、つまらぬ
疑を起して居る。

これを譬へて言うならば、今日どこそこまで来い、金百兩やるといばるゝ、又我家に居れば、随分人並の商ひして居らるゝ、日雇錢は儲けらるゝといふ時、百兩たい貰うことならば、行かうかと思へども餘りウマ過ることぢやがどうぢややら、其よりは地道の商がよからうか、イヤ貰ひに行かうと、吾心が行きつ戻りつする、これがホンの疑といふもの、これを猶豫といふ

各も極樂參りはウマイことなれども、どうもたのむばかりで、佛になるといふことは、餘りウマ過ることぢや。それあてごとにせうよりは、この善根の商でもせう、この功德の日雇でもとらういふやうに、たとひ少なくにもモウ一色どうかこうか仕方のある體ならば疑ふも尤至極、進んだり退いたりする筈ぢやけれども、トテモ外

に一文も儲けることのならぬ身ぢやないか、居ても立ても仕方はない、とても三途の河に凍わ死にすることも、善根功德の錢仕事のならぬからだ持ちて居乍ら、彌陀たのんでも落ちたらといふ案じトントつまらぬことぢや。

この根を切つて下された「歎異鈔」の御ことは「タトヒ法然上人ニスカサレマイラセテ、念佛シテ地獄へ落ちタリトモサラニ後悔スエカラズ乃至イヅレノ行モ及びガタキ身ナレバ、トテモ地獄ハ一定スミカゾカシ」文もどより自力の行のかなはぬこの身なれば、この親戀はもとより地獄一定ぢやと手を離しておしまいなされた。サア各ごうぢや、地獄へ落ちるといふことは誰が教へた、釋迦の金言、極樂へ參らるゝとは誰が教へた、ヤハリ釋迦の金言、地獄一定がまこ

とならば、信じて佛になるもまことぢや、其をば地獄へ落やうかと案じ乍ら、ナゼ淨土へ參らせうの御助けを信せぬ。この本願たのんで地獄へ落るならば、御開山もろともに地獄へ落ちやうとナゼ覺悟が出来ぬぞ(佛に落入らば一大事ぢや)いよく我機の手を離れて、地獄ならでは趣くべき方のない我身ぞと、もとより落ちてゐてきくならば、落ちやうかの案じはいらぬ。どうしたならば助けうと仰せらるゝぞ、あなたの御好み御思召をよく聞かねばならぬ、教の如く的心中にならば、地獄へ落ちたいとても落ちられはせぬ。その誓約の約束あやまちのう無上涅槃のさとりに至らるゝぞと仰らるゝ。

一四七 信後より立還りて初一念を疑ふ疑

喜はれぬことを苦にやむ疑

御報謝のつらきことを苦にする疑

右の二種の疑は、信後より立還りて、初一念を疑ふ疑なり。先この喜びといふは、信心得たるしるしに起るからは、この喜びのなきは即信のなき故ぢや。又斯るみのり聞いて嬉しうないは無宿善ぢや(この御法をみて、一滴も涙を流すは、佛の威神力ぢやとある云云)然れば一向に歡喜なきは信心のなきのぢや。

然るに喜びつけに喜ばれず、思ひ出して我心忙然として居ることあり、忘れて居ることもある、その隔てらるゝのを煩惱の所以と仰らるゝ(歎異抄に歡喜のたまふ)一向に嬉しやゝのなきは、煩惱の所以ぢやない、信心を得ぬ所

以ちや、喜べぬことを喜べとは仰せられぬ(子供に正月になるか)さきに
あてのなきことを喜べとは仰せられぬ。應法妙服百味飯食を今にも
與へてやる、喜べとのたまふ。

さて其上に御報酬が面白やくで勤まらぬことを疑ふもの、これ
又大切なる談合ごとちや。動もすると誤る所ちや。これも人の子を
育つると、吾が子育つる譬を以てよく知るべし。凡夫の自性はもと
の儘信を得たればとて、寒熱飢渴劬勞なことが身に辛うないといふ
ではない、然れども信心のまことの子が出来ると、辛いのが樂みち
や。貧しき中から五人七人育てる、又勤まるものと勤まらぬもの、
互に誤らぬやうを夜さめたりたもの、又御報酬も我がするでない(不孝
孝行になりしホシの)みな御信心の御はたらきちや。

一四八 身の不實より疑を起すこと

身の不實より如來の眞實を受けられぬものあり、この疑も亦甚だ
多い、これ我身の實意が往生のたねではない、往生のたねは如來の
信心なれども、目毛に塵つけば大山も見ぬ、我が小さき不實で大き
な御慈悲を妨げる也。

一四九 懼慮と疑とは別なり

懼慮と疑とは別なり。大事と思へば懼慮する者なり。
譬へば、道中で路金を腰につけておくに、盗まれた覺れも落した
覺れもなし。有るに違ひはなれども、大事ぢやと思ふ上からは、

度く手を廻して、ひねくりてみるなり。

一五〇 身に覺のあれば、疑はざる也

「我等カタメニ相應シタタフトサノホドモ、身ニハオホヘザルガ
ユエニ」と仰せらるゝ、身に覺れたと覺ぬとは、大違ひぢや。
春さきに秋のこと思ふたのと、秋になつて秋風にあたりて身にお
ぼれたとは大違ひ、尊さが身にこたへたのは大違ひぢや。
又家内で物の亡せた時、残らず喚出して家内中のものを穿議する
のに、その中で或は隠しおき盗みおいたものと、ホント身に覺ぬの
なきものは大違ひぢや、お慈悲の尊さが手ごたねして覺れたのは
大違ひぢや。

一五一 信を得ても落着かれると思ふ可らず

存覺上人云「他力佛智ノ至極ハ、イカバカリトシリテカ、コレマ
デトオモヒテ、善友知識ニモチカヅカザルヤ」文。まことに嚴しき御
誠ぢや。

今日のわれは是まで限りのなき佛智、限りのなき御慈悲に限り
をつけて、モウ何もかも聞いてしまつたやうに思ひ、モウ佛もたの
んでしまつた、信心も得てしまつたけれども、一生涯御報謝のため
法に離れるなど仰らるゝ故に、聞いて居るといふ心で御座に列りて
居る。これが限りもなき佛智に限りをつけたといふもの、御慈悲も
嬉しやくと相續もせぬやうな信心を取つて、それを棚の上へあげ

ておくから、得手な方へ廻りたいのぢや、お慈悲も嬉しうない、お念佛も出ぬ、信心を得てしまうて何になるぞ。

それならばいつまでも落着かれぬかといふに、左様ではない、落着けば落着くほど、このからだか落着いて居られぬ。身のおきどころもなう嬉しうなりた、それならば喜んでばかり、稱へてばかり居るかといへば、煩惱に隔てられ、妄念にさへらるゝ。そこで同行知識が戀しうなる、仍て死ぬまでお慈悲嬉しや尊とやの限りなき味の知れるところまで引立てゝもらはねばならぬ。これを古人の詞にも泛舟入海不得安身而坐、欲安而波蕩之というたところぢや。

一五二 先徳出離の道にわづらい給ふ事

○「恵心僧都行實」(丁左) 僧都嘗爲決自身往生得否自出城之西南作道四塚響ト、(俗曰)時會下雨、一老翁卒爾仰天曰既已詣極樂也。以決其疑矣。或令吉野巫女卜之、蓋思之深也至于此矣」文

○「長明發心集」七(初) 恵心僧都謁空也上人事、後生の事申出し、極樂を願心深侍り、往生はとげ侍りなむやと尋給ひければ云云六行觀のこ實理さはまり侍りて、涙をながし、筆を合て歸り給ひにけり。

ワレコレ古佛とのたまふ、この行跡いかん

○「黒谷傳」二(初) なほ出離の道にわづらいて、身心やすからず、順次解脱の要路をしらんために、一切經をひらきみたまふこと五遍なり。

これ又示現の人

○道綽禪師の、自身の往生得否をわづらい給ふこと、「新修往生傳」
「選擇集」の終にもこれをあぐ。

道綽の高徳このこと如何。

これらのこと、よく料簡すべし。

一五三 落着けば動き出す也

皆な人毎に後生願うて居る中に、落着いて居る人は多く、後生が
案じられて、落着かねて居るは少ない。

その落着いて居る人は多いが、これに甚だ紛れがある。後生が大
事になりて、御慈悲が聞えて落着いたのと、まだ大事な味が知れず
に、たい御助けとばかり大擾みに落着いたのと異ふなり。ホンニ御

慈悲を聴聞しぬいて落着いたのは、落着けば愈々手足が動くやうに
なる、船に乗りて落着いたのと、まだ岸の上に居て落着いて居る程
の違ひなり。ホンニ船に乗りて落着いたならば、落着くと動き出す
とが一緒ぢや。欲安身而坐水動之の道理ぢや。

蓮如上人(天正八)は、水鳥は遊んで居るやうに見ゆれども、人の
見ぬところで脚を動して居ると仰せられた。

一五四 歎きには實なき也

人ごとに御報謝が勤まらぬと云うて歎くけれども、ホンマに勤め
たい氣で歎くではない、たい口説きならべるので、その心持を譬へ
ていはい、貧乏なものが薬を呑んで、薬禮が出来ぬ、金でかりたな

れば、右から左返さにやならぬけれども、薬を飲んだこと故に、禮はしたいと思へども錢はなし。奉公して給金を取つて返すといふ程の實意もなし。そこで先づ醫者の所へ歎きに行く、段々お蔭で快うなりましたが、御禮の一段が一向御不沙汰でござりまする云々さういふ意はどうぞホンマに禮をしたい心ではない、さういふてあなたからイヤもう禮はいらぬ、一向施薬にするというて貰ひたい、もうよいと言ひ切つて貰ひたさに歎きに行く如くぢや。

今日の面々も、御報酬がどうもくと奥歯に物のあるやうに思ふ心は、大なれ小なれ、勤めませうの心中ならばよけれども、イヤ御報酬はつとまらずとも大事ない、それが凡夫ぢやと、イツソ御報酬には係らぬ、往生は如來の大悲で御與へと言うて貰ひたさに、歎い

て出て来るなら悪い。あなたは固より施薬の御つもり、殊に命を救うて下さる御禮なれば、とてもつり合ふ様な御報酬は勤まらぬが嬉しさまことならば、心一杯運べよと仰せらるゝ。

一五五 自然の報酬

一念歸命の信心は、貧者の飲んだ薬ではない、大きな家督譲られたれば、自ら孝養の出来る如くぢや云々。

一五六 百尺の竿頭一步を進めよ

皆人毎に聞かぬではない、後生願はぬではない、それならばというて、ホンマに聞かぬか、ホンマに願ふかといへば、ホンニ心の底か

ら聞きもせず願ひもせぬ。それ故にモウ一足といふ所が皆ゆきつきかねて居る。

これ聞くことは随分不足はなけれども、聞く心中が不足ぢや、本願の謂れは不足なう聞いたが、わが爲めといふことの聞きやうが不足ぢや。

それ故に、領解前は皆が手に握つたつもりなれども、まだ往生が手に握つた心にはならぬ。こゝが「ゴ、ロチガナリガタキ」所ぢやこの道理ぢやなど、道理は眼に見ゆれども、わが心がそこへゆきついてくれぬ、この所で骨折らにやならぬ。

おれがかう頼んでおいたから助かるの、おれがかう思うて居るが信心ぢやと云ふやうなことではなし。それならばこちらの心はサツバ

リと拂ひのけて、あなたの御手元にある信心かといへば左でもなしあなたの御手元を、たのむ心を、こちらの心中へ起して下されたのやち(わが心たのむ思ひではない云々)

煩惱妄念どりのけてたのむではない、煩惱妄念の中へ、如来の御慈悲がそみわたりて下さるから、煩惱妄念かへなから、佛智不思議が信せられた、煩惱妄念どりのけて喜ぶのではない、煩惱妄念の其中から嬉しや有難やの稱名が浮ぶのぢや。

一五七 お慈悲ばかりあてにするは誤り也

善因善果惡因惡果は佛法の正道理、然るに或物が佛の御前へ來て申すやう、梵志の中に人の望に任せて、天上に生れさせると申すも

のあり、佛も何とぞ人の願ふに任せて、天上へも生れさせ給へと申上げたれば、其時如來の仰せらるゝやう、大なる石を池へ投げ込んで、その池の傍に人ありて、此石浮べくと祈りたればとて、石の浮むべき道理はない、十悪業をなしたるものを、いかに佛の力で天上へ生れさせたいと思つても、自分に因がなければ及ばぬと仰せられた。

動もすれば、淨土眞宗にはかやうな心のものがありて、如來の御慈悲で助けて下さるゝであらうぞとばかり思つて、我業で沈むことを何とも思はず、決定せよと仰せらるゝ信心も確と決定せず、地獄へ落ちぬ氣になりて居るものあり、これ大いなる誤り也。

一五八 佛のたねを與へて佛にしてやる

法藏菩薩の御本願は、凡夫のこゝろをたねとして、佛にせうといふのではない。佛のたねを與へて、佛にしてやるぞと、五劫が間の御思惟で、他力回向の本願を立てさせられた。

一五九 與へたうても與へられぬ

他力といふは、御あたへといふことなれども、たとへば親が我子に身代ゆづらうと思つても、只雲助盲跛の身では與へられぬ、それ故に大悲の御念力ぢや。

一六〇 邪見 僣慢

邪見僣慢は、八萬四千の煩惱の根になる、三毒よりも御嫌ひなさるゝ、その邪見何も別のものではない、先づ邪見といふは、其體は因果撥無ぢやが、後生をナニトモ思はず、罪の怖ろしうないのが邪見なり。僣慢といふは、何もかも承知して居る信じて居る、おれは随分喜んで居る、稱へて居ると思ふ心が僣慢。この二ツの心が、銘々心中にあるかないか願われよ。

其ならば、後生を何とも思はぬは、因果撥無の邪見の残りに違ひない、全く犬猫見た様な我等が心かと思へば、随分この世の罪も報いも辨へて居る、人も殺さず、店に飾りてある物も取らぬ、現世の

因果は知り乍ら、未來のことになれば、只今眼閉ぢ次第に、湯玉の沸ね返る中へおちねばならぬことを聞せられても、ソミ／＼と思はれぬが邪見ぢや、これ邪氣のある時は甘い物たべても其味が知れぬが如くぢや、ホンマの味の知れぬのが、邪見のなしわさぢや。

「涅槃經」云、「一切梵行、因善知識、一切惡行、因邪見全文御本」

一六一 邪見のすがたの事

邪見ヅノリ邪見落付の安心が當時甚澤山ぢや、まことに恐るべきは邪見、佛の敵ぢや。

時に邪見といふを一口に申さば、罪を怖れず惡を許すことぢや、これが勝れた法を聞くもの、動もすれば此の邪見になるものぢや。

他宗にありても、最邪見になりたがるものが眞言禪宗なり、それより下は華嚴天台の二宗なり。飛びぬけた勝れた法故に邪見に墮るなり。その安排は、淨土眞宗の門徒が願力を小楯として握りとして、悪を怖れず罪を許し、未來を何とも思はぬやうになる、それ故に出離の大事を知らず、眞實に佛法に志もない、これ他力佛智の御不思議にて、凡夫のまゝにて佛になるといふ勝れた法故に、ハヤ罪を許し悪を赦すやうになる、罪惡を怖れぬやうになるから、未來が何とも思はれぬ様になる。未來を何とも思はぬから、喜べぬのも苦にならず、御報謝のつとまらぬのも苦にならず、掟の守られぬのも苦にならず、これこそ本願の正機なりと、その邪見を募りて出るやうになると、他の勵むのを自力の策勵なりと侮るやうになる、これが只

今の邪見なり。

時に餘所の宗旨の勝れたる教は、先づ小乘三乗の教を根とし始めとして其上に教ゆる、何れの佛法といふも迷悟因果の道理が根本なり。然るを淨土眞宗では一文不知のものにたい勝れたる所ばかり教る、これ邪見になり易き也。その勝れたる願力を杖柱として、惡を宥し罪を怖れぬやうになるは、大いなる誤り也。急救常没の大悲心、至極短命の機を本とし給ひて、殊に今日の機類、在家止住一生造惡至愚極惡にして、とてもかくても力なき身の上を、彌陀智願海に投入して、身の善惡も相忘れて、深く信じたる所にてぞ、願ともいはず行ともいはず、善をもいはず惡をもいはず場なり。たい落付いて惡募りて居ることぢやない、この事深く味ふ

へし。

今日のわれは、六道茫々の中にありて、四禪絲端の身を持ち乍ら、いよく出離の大事を知らぬからちや、後生大事の味を知らぬからちや。一文不知のものゝ、邪見になつた程、仕方のないものはない。

一六二 アタリマへの一言佛教儒教を反古にす

佛の慈悲を聞いて、佛ちやもの當然などと思つてゐる。アタリマへの一言、甚だ恐ろしい邪見の詞ちや、親の恩もその通り、當然と思ふ故に、親の物は子の物、家貫うても體貫うても、孝行がならぬ然れば當然と思つて居るが不孝の根ちや。

親なればこそ産み育て下された、懐抱十月三年鞠養、いかなる孝行してもその恩を返すこと當然ちや。然ればこのアタリマへの一言は、佛教儒教を反古にせにやいへぬ言葉ちや。それなれば親の恩育は當然ではない、さればこそ大恩と仰せらるゝ、善知識の御化導も當然ではない、六親兄弟も案じてくれぬ後生を、善知識なればこそ御案じ下さるゝは大恩ぢやないか、阿彌陀如來の御本願もその通り、おれも諸佛なみくぢやと仰せられて、この本願お立て下さるぬかというて、理屈いふことは出来まい、それをば自受法樂の御さとりをすてゝ、五劫永劫の御骨折、何に譬へん方もなき大恩ぢや。

一六三 道德は泥道を行くが如し

泥道を行く時は、顛けまい／＼と思へども、滑りて顛ける、これ過也。顛ければ泥になる、泥になりてもよい故に、足運んで来いと言はるゝならば、起き上り／＼進まねばならぬ。

掟を守るもこの通りぢや、過あらば改め／＼来いとのたまふ。もし他宗の戒行の様に、一度犯せばもとの僧になられぬとは仰せられぬ、煩惱の泥は極樂へ來着いた時に、洗ひ落してやると仰せらるゝ也。

一六四 安心消息

南無阿彌陀佛といふは、萬善萬行の總體なれば、いよ／＼たのもしく、たふとし、阿彌陀如來のむかし法藏菩薩たりしとき、五劫の

思惟とて、かぎりなき永き年月に、思案をめぐらし給ひ、そのうへに兆載永劫の修行といふて、われらになりかはらせられ、永々の間の御苦勞にて、つみかさね給ひたる功德善根皆こそ／＼この名號にこめて成就し給ひたれば、因位の萬行果地の萬德といひて、佛の御身にありたけの功德をもて、成就し給ひし名號なり。然るにそのあらゆる功德をつぶさにきしれとはのたまふにあらず。もとよりあぶなきいのちなれば、いのち一刹那にせまりしものまで、もらすまじとのたまふ大悲なり。たゞその大悲本願のいはれ、名號六字のいはれが耳にきこへ、こゝろにといきて、うたがひなくわれにまかせよ、つみはいかほごふかくとも、われをたのめ、かならずたすけすくはんとのたまふ、ほとけの御よろこびこそが、南無阿彌陀佛の

いはれなり。南無といふは、うたがひなく、その仰に順ふころ、そのころ即ち後生助け給へたのむころ、たのむころがまかせ奉るころ、その時に攝取不捨とおさめとりて、すてぬこのたまふが、阿彌陀佛の四字のころなり。この御ころが、わが身の上につきこねて、いよくわれをたすけたまふ大悲の本願ぞと、疑なくおもひとりたるばかりなり。そのうへには、聲に出してとなふる計り、うたがひなきころも南無阿彌陀佛、口にとなふるも南無阿彌陀佛、これが五劫に思惟し給ひし第十八願のいはれなり。うたがひなきころが信心なり、露ちりばかりも、往生にうたがひなしといふは、わがもち前の心にてはなし。南無阿彌陀佛のいはれをきうるときに、如來の大悲の御まことを御あたへに預りたるころなり

されば病は死の縁とありて、病重れば死ぬるは定りごと、病なき身さへも、あすをしらぬいのちなり。無常の道理は、いづる息は入るをまたすとある。然ればいのちはあしたの露のごとく、露のいなづまの如くとのたまふ佛の御ことばなれば、いかなる人も、けふやその日くと覺悟すべきことなり。われらが壽命は、生れはじめしより定りたる定業なれば、力及ばすとも、今が六十とおもへば六十也七十とおもへば七十也、浮世は同じうき世にて、たい苦しみのみおほくなり、罪とがをますばかりなれば、あながちに壽命をむさぼるべきにあらず。斯様な不思議の本願にあふて、永き未來を助かることのみをいづくまでもよろこぶべきことぞかし。